岩崎　純一　著

『岩崎純一全集』　第五十五巻「科学技術、産業（一の五）」

医学・生理学・薬学および医療、保健、薬物

編纂、監修　　岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

『岩崎純一全集』第五十五巻「科学技術、産業（一の五）」

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第五十五巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、医学・生理学・薬学および医療、保健、薬物に関する述作を収める。

目次

巻頭言
第一編　〇歳～十九歳
第二編　二十歳～二十九歳
第一部　岩崎純一の知覚世界
第二部　私の知覚世界全般の解説とサイトご訪問者の統計
第三部　日本の共感覚者女性の初潮に関する研究
第四部　日本の共感覚者女性の性的特徴に関する研究
第五部　私の対女性共感覚記録
月経周期に色彩や音が見聞きされる共感覚①　「フェロモンを”聞く”ことはありうるのではないか」
月経周期に色彩や音が見聞きされる共感覚②　「井戸に石を投げ入れる思考実験による説明を試みる」
女性共感覚者の体質について
対女性共感覚　～実証され続ける東洋的な女性身体観～
第六部　『私には女性の排卵が見える　共感覚者の不思議な世界』(電子書籍版を含む)
日本の共感覚者女性の初潮に関する研究
薬物と共感覚の関係から見えてくること
第七部　薬物使用者に見られる共感覚体験欲求の機序
脳死を共感覚から考えたい
第三編　三十歳～三十九歳
第一部　拙著が出版されます
第二部　拙著『私には女性の排卵が見える　共感覚者の不思議な世界』について
第三部　私の知覚世界全般の解説とサイトご訪問者の統計
第一章　私の知覚世界全般の解説とサイトご訪問者の統計(1)
第二章　私の知覚世界全般の解説とサイトご訪問者の統計(2)
第四部　共感覚に関連する知覚様態・症状
第五部　共感覚に関連する知覚様態・症状の一覧
第六部　麻薬・覚醒剤・危険ドラッグ・指定薬物等による共感覚の出現の知見の有無と当該薬物の国際条約及び世界各国・日本国の法令等における扱いとの対応表

第四編　四十歳～四十九歳
第五編　五十歳～五十九歳
第六編　六十歳～六十九歳
第七編　七十歳以降
第八編　著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの
第九編　著作権者が岩崎純一であるもの

第二編　二十歳～二十九歳

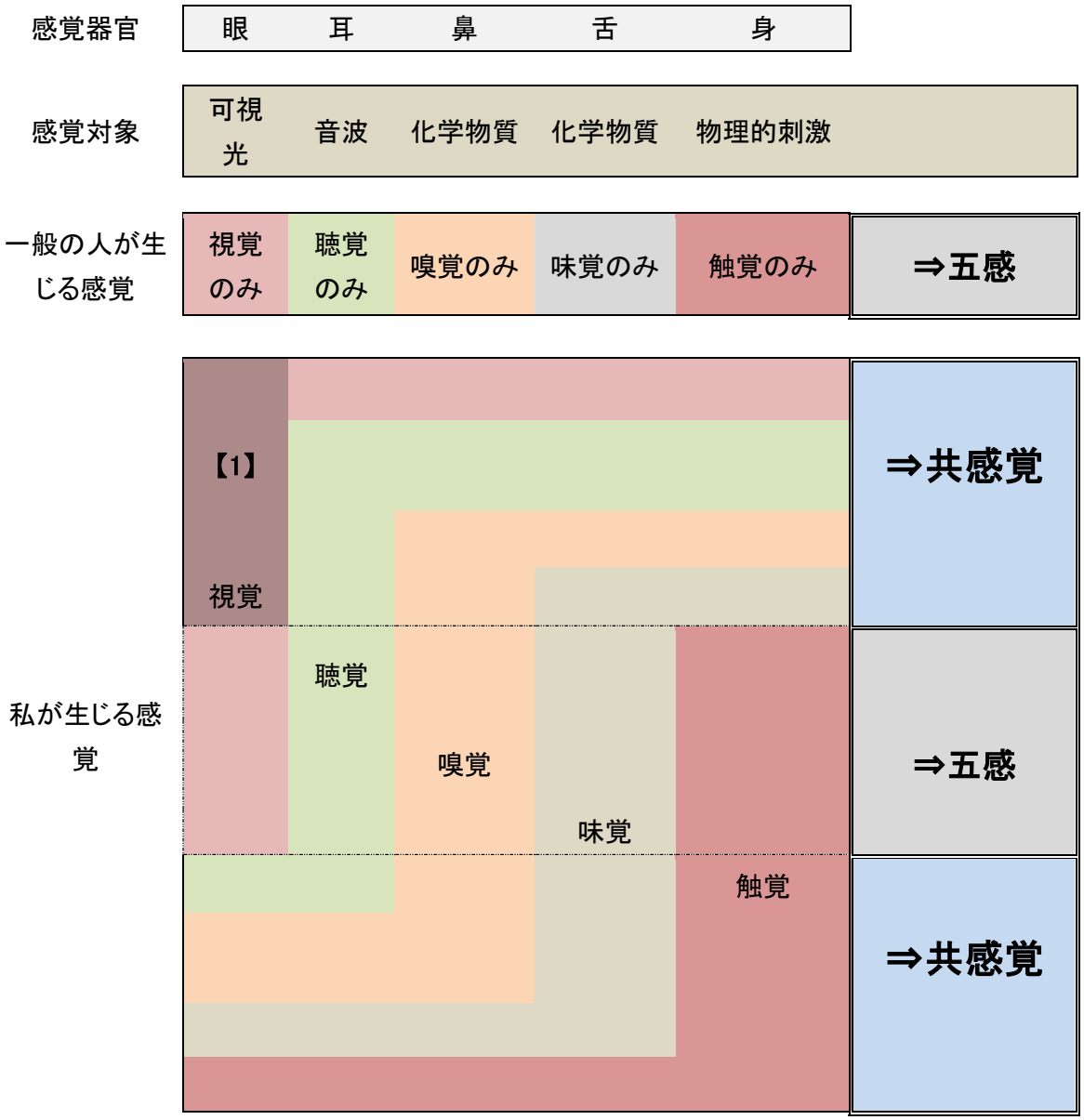
第一部　岩崎純一の知覚世界

2005 年 1 月 16 日　起筆
2005 年 3 月 15 日　公開
2008 年 6 月 20 日　加筆
2016 年 9 月 11 日　最終更新

管理人岩崎純一の知覚世界(1)

●点線で囲ったところが、いわゆる五感。

●一見すると共感覚ではない領域も共感覚に含めているが（例えば【1】の領域）、これは、文字に色が見える感覚など、一般の人には存在しない「眼→視覚」「耳→聴覚」などの領域も共感覚と呼称されているため。



岩崎純一

サイト：http://iwasakijunichi.net/

管理人岩崎純一の知覚世界(2)

これらの知覚・症状は、共感覚者仲間、知人、大学教授や医師などの専門家といった私と面識のある第三者から「主に食事の席で」指摘された内容の一覧であり、ほとんどが当てはまるという自覚はあるものの、あくまでも参考程度に掲げておいた。

特に、読字障害、離人症、アスペルガー症候群については、社会生活に支障がない限りそうと診断されない傾向が強いようであり、現在の（あるいは成人以降の）私には全く当てはまらないと考えられる。

元より、これらは主に幼少期・児童期・10 歳代の頃の知覚世界であり、現在ではほぼ消失している知覚もあるが、共感覚のように現在もなお強固に保持し続けている知覚もある。

知覚・症状	生理学上の呼称（専門家と話したりメールしたりするときに仕方なく使っている呼称）	2009 年現在の生理学上の扱い	私の呼称（今のところ、こちらに変えてほしいと思っている呼称）	私の観点	2009 年現在、私の体験頻度
文字に色が見える 音に色が見える 風景に音が聞こえる 味に形がある 匂いに形がある 音に匂いがする 形に色が見えるなど・・・	**共感覚**（近年、「刺激→生じる知覚」の順に grapheme→color などと表記する規定が設けられた）	正常、または神経系の異常。（ただし、DSM や ICD には未記載。）	**共感覚**（自分にとってはただの「感覚」だが、今はこう呼ぶほか仕方ない）	病理・神経異常ではない。五感分裂以前のヒトの普遍的知覚。先住少数民族では今も普通。	常時（五感も共感覚も常に自覚）
いわゆる「感受性・感性が極めて豊かな人物」	**Highly sensitive person (HSP)**	能力・障害	このままでよいと思う。	社会生活が極めて困難な場合以外は、特に問題視するようなものではない。	常時

読字の困難、黙読の困難、文字・記号と一般的な風景との同一視	**読字障害、失読症、ディスレクシア（の疑い）**	障害	**読字困難、非抽象形状覚**	病理ではない。江戸時代までの日本人及び中世までの欧州人では普通。	時々。稀に、直前に強い精神的ストレス。
言語理解の困難、ヒトの言語と一般的な自然音（鳥の鳴き声など）との同一聴	**単独の呼称なし**	障害	**聴語困難、非抽象音声覚**	病理ではない。江戸時代までの日本人及び中世までの欧州人では普通。	時々。稀に、直前に強い精神的ストレス。
絶対音高の特定	**絶対音感**	能力	**絶対音高感**	幼児は皆保持する。	常時
閃輝状の視覚障害、視野狭窄、視野周辺部の暗黒化、強度の頭痛、嘔吐、失語	**閃輝暗点、閃輝性暗点症、偏頭痛**	脳血管障害、または神経系の異常、または精神障害など	**閃輝暗点型偏頭痛**	責任感があり、ストレスを溜め込みやすい真面目な性質の女性に多い傾向あり。	時々。しばしば直前に強い精神的ストレス。
非抽象的な写像記憶、短時間での羅列的な大量の記憶	**直観像記憶、写真記憶、映像記憶**	能力	素晴らしい呼称。このままでよいと思う。	幼児は皆保持する。	時々。稀に直前に強い精神的ストレス、または極度の感動。
目視のみによる対象者・対象物への触覚	**ミラータッチ共感覚**	正常、または神経系の異常	**目視触覚**	網膜・視神経から大脳視覚野までの一連の過程が視覚として独立する前はヒトの普遍的能力。ヒト以外の霊長類・哺乳類	時々

				では普通。	
遠方からの女性の排卵・月経・発情の感知、女性に対するミラータッチ共感覚	**単独の呼称なし**	正常、または神経系の異常	**対女性共感覚**	メスを外敵から守護するためのオスの健常な能力。ヒト以外の霊長類・哺乳類では普通。	しばしば
巨視症状、小視症状、変視症状、時間の長短の相対化、偏頭痛	**不思議の国のアリス症候群（これのみ可愛らしい名前なのはなぜ？）**	精神障害、または神経症性障害	**時空変質感**	幼児は皆保持する。	頻発
離人感、身体からの自我の遊離、傍観者化したもう一つの自我、痛覚の減退	**離人症、離人性障害（の疑い）**	精神障害、または神経症性障害（解離性障害の一。）	**離人感、個我離脱、自我観望**	病理ではない。精神的・肉体的外傷をもたらす外敵からの防衛本能。動物では普通。	頻発
コミュニケーション機能の遅滞、鋭敏な五感、膨大な記憶能力	**アスペルガー症候群、高機能自閉症（の疑い）**	発達障害（軽度の自閉症の一。自閉症とアスペルガー症候群は分けるべきとする学者も多数いる。）	呼称を与えない。	進化の過程で人類総発達障害の時代があった可能性がある。	常時（人格・体質そのものの基層）

岩崎純一

サイト：http://iwasakijunichi.net/

管理人岩崎純一の知覚世界(3)

これらの知覚・症状は、共感覚者仲間、文化人類学・言語学愛好家仲間といった私と面識のある第三者から「主に食事の席で」指摘された内容の一覧であり、ほとんどが当てはまるという自覚はあるものの、あくまでも参考程度に掲げておいた。

特に、知覚世界(2)の読字障害、離人症、アスペルガー症候群については、社会生活に支障がない限りそうと診断されない傾向が強いようであり、現在の（あるいは成人以降の）私には全く当てはまらないと考えられる。

元より、これらは主に幼少期・児童期・10 歳代の頃の知覚世界であり、現在ではほぼ消失している知覚もあるが、共感覚のように現在もなお強固に保持し続けている知覚もある。

知覚・症状	一般の成人男性	岩崎純一	霊長類・哺乳類のオス
外界知覚の基層	五感	共感覚	共感覚か
記憶方法の基層	抽象的記憶	直観像記憶	直観像記憶
周期的な発情期	消失	消失	保持
自分と同種のメス（女性）の周期的な発情期	残存（今でも女性は性周期によって、体調・心理・性欲・化粧の乗り・五感の鋭さなどが変化）	同左	保持
自分と同種のメス（女性）の基本的な排卵方法	周期排卵	同左	交尾排卵または周期排卵
メス（女性）の性的能力との対比	不均衡、非効率	半均衡、半効率、動物のオス時代を維持か	性衝動・発情期は互いに一致
メス（女性）の排卵の遠方からの感知 その方法	できない 科学的分析	稀にできる 共感覚	できる 共感覚か
メス（女性）の月経の遠方からの感知 その方法	できない 科学的分析、独立した五感（視覚・嗅覚など）、言語コミュニケーション、または特	時々できる 共感覚	できる そもそも衣服を着ないので、視覚でも分かるが、共感覚か。

	定の女性との同居での慣れ		
メス（女性）の発情期（発情状態）の遠方からの感知 その方法	できない 科学的分析、言語コミュニケーション、または特定の女性との同居での慣れ	しばしばできる 共感覚	できる（できなければ種の存続に関わる） 共感覚か
メス（女性）の排卵のコントロール	できない	半随意的にできる（排卵が完全に不随意的だと断定できない女性が周辺に何人もいる。女性当人たちは気付かない。）	コントロール可能な種が多数発見されている。鳴き声や交尾行動でメスの排卵を操る。
周辺のメス（女性）の性周期に連動する体調の変化	なし（配偶者がいる場合は、稀にあり）	あり	あり
メス（女性）の唇の色や温度からの排卵・月経の感知	できない	稀にできる（唇に聞こえる音からも）	ヒトのような赤い唇を持たない。四足なので、直接外性器の色で把握できるが、独立した視覚かは不明。（網膜の構造もヒトと異なる。）
メス（女性）の肌の色や温度からの排卵・月経の感知	できない	稀にできる（肌に聞こえる音からも）	できる。体は体毛に覆われ、かつ衣服を着ないので、多くの哺乳類のオスにとって、「メスを見る」ということは「メスの体毛を見る」ことである。
メス（女性）の体毛・髪の色や温度からの排卵・月経の感知	できない	極稀にできる（髪に聞こえる音からも）	
音感	相対音感（ただし、絶対音感保持者もい	絶対音感	完全な絶対音感を保持か

	る）		
ヒトのメス（女性）の声とその他の動物のメスの声の区別	絶対的な境界	稀に曖昧	全く区別無し
言語	日常的に使用	日常的に使用	言語を持たない
文字	日常的に使用	日常的に使用	文字を持たない
文字の記憶方法・読み方	文字の形状に音声を当てる	共感覚で見た覚えのある色をした形状を文字と認識	文字を持たない
文字や記号と、風景との区別	絶対的な境界	しばしば曖昧	全く区別無し
言語認識世界	主格・対格型	能格・絶対格型	言語を持たない
上記の文法を持つ言語の分布	現代英語・現代欧州語・現代日本語	上古代～江戸時代日本語・現行の少数民族言語・先進国内の少数言語（バスク語・ブルシャスキー語など）	言語を持たない

岩崎純一

サイト：http://iwasakijunichi.net/

第二部　私の知覚世界全般の解説とサイトご訪問者の統計

2005 年 3 月 8 日　起筆
2005 年 3 月 15 日　公開
2017 年 3 月 13 日　最終更新

このページには、基本的な共感覚（2005 年の初公表時の内容）や基本的な共感覚の続編（詳細な解説・画像・動画）や応用的な共感覚（詳細な解説・画像・動画）のページをご覧いただく際に参考になる「私の知覚世界」についての解説のほか、私のサイトや共感覚関連の集いで得られた調査結果を掲載しています。

必要に応じ、ユーザー名・パスワード共に「iwasaki-j」でご覧下さい。

なお、共感覚に関連する知覚様態・症状の一覧もご参照下さい。

（私に限らず、共感覚者が一般に保持しやすい知覚様態・症状を、下掲のご訪問者の統計から抜き出してまとめたページです。）

私の知覚世界全般の解説

時期的には、基本的な共感覚の続編（詳細な解説・画像・動画）の前後に並行して執筆・作成したものです。

●私の知覚世界(1)（一般の五感との違い）（PDF）

●私の知覚世界(2)（共感覚以外の感覚・症状）（PDF）

●直観像記憶と共感覚

直観像記憶と共感覚

「岩崎純一のウェブサイト」へのご訪問者の統計

「精神病理学・精神疾患の研究」の「今までの交流の概要」にも掲載しており、並行してご覧いただくことをお勧めします。

●「岩崎純一のウェブサイト」へのご訪問者の統計（1）（PDF）

●「岩崎純一のウェブサイト」へのご訪問者の統計（2）（PDF）

各種調査

『岩崎純一全集』第五十五巻「科学技術、産業（一の五）」

●色彩に関するアンケート（PDF）
2009 年まで実施していたアンケートです。結果は拙著『音に色が見える世界』に掲載しています。

●日本の共感覚者女性の初潮に関する研究（PDF）
非常に変わった研究ではありましたが、「共感覚の保持期間の長さ」と「個体の成長の緩慢さ」との有意な関係を女性において示すことができました。ご協力下さいました全ての女性の方々に改めて厚く御礼申し上げます。

第三部　日本の共感覚者女性の初潮に関する研究

2006 年 7 月 10 日　起筆
2009 年 7 月 12 日　簡易版を公開
2009 年 11 月 15 日　詳細版を女性施設の閲覧室にて公開
2016 年 9 月 11 日　最終更新

一般利用者には非公開。閲覧希望者は個別に岩崎まで問い合わせよ。
関係女性は、各女性施設の閲覧室にて閲覧可能（閉架式）。当該閲覧室を訪れよ。

第四部　日本の共感覚者女性の性的特徴に関する研究

2006 年 7 月 10 日　起筆
2009 年 11 月 15 日　女性施設の閲覧室にて公開
2010 年 9 月 20 日　最終更新

一般利用者には非公開。閲覧希望者は個別に岩崎まで問い合わせよ。
関係女性は、各女性施設の閲覧室にて閲覧可能（閉架式）。当該閲覧室を訪れよ。

第五部　私の対女性共感覚記録

2006 年 7 月 10 日　起筆
2010 年 7 月 24 日　女性施設の閲覧室にて公開
2016 年 9 月 11 日　最終更新

一般利用者には非公開。閲覧希望者は個別に岩崎まで問い合わせよ。
関係女性は、各女性施設の閲覧室にて閲覧可能（閉架式）。当該閲覧室を訪れよ。

月経周期に色彩や音が見聞きされる共感覚①　「フェロモンを”聞く”ことはありうるのではないか」

2007 年 10 月 28 日　起筆、擱筆、公開

「女性の月経が”見えたり”聞こえたり”することがある」という僕の共感覚を説明しようと思い、何とかして色々と考えてはいるけれども、「どういう感覚なんですか。」という最も端的な質問に答えるのが、実は最も難しい。しかし、こういうことに、大学での勉強や仕事の上で関心のある女性の方々からの質問のおかげで、やっと答える気になることもあるから、できるだけ言葉にしてみたいと思っている。

関連する記事
http://ij-art-music.sblo.jp/article/4759604.html
http://ij-art-music.sblo.jp/article/5604599.html（２番目の質問）

昨今は、何かとフェロモンが話題だけれども、このフェロモンというもの自体が、実は西洋医学の範囲内での、アリストテレス的五感の範囲内での、すでに世間では、慎重さだとか身体への敬意だとかいったことよりも、ただの話題性と流行性とを持って日本でも扱われ始めているような風潮においての、興味の対象に過ぎない気がしてきて、どう対応すればいいんだと、自分でも苦笑してしまう。そもそも、「月経の匂いがする」感覚と、「月経に色がある」、「月経が聞こえる」感覚に、僕の中では差がない、あるいは密接不可分の唯一無二の知覚体験であって、かつては別に特別でも何でもない動物的男性的感覚であっただろう、ということを、最初から問うているのが、僕の視点なのだ。

考えてみれば、フェロモンという概念への固執自体が、一見すると人体の解明への新たな道であるかのように映るけれども、実は、「女性は化学物質を発している。それは、男の嗅覚に訴えるものであって、視覚や聴覚には訴えかけない。」という、西洋的・自然科学的・現代的な前提から科学者の男を離れられなくする。僕が言っているのは、「あの女性からは、28 日周期で、青い音と赤い音とを行き来するのが見える（聞こえる）。」というような共感覚のことなのだ。

科学者には、最初から「男にはそういう能力はありうる」という発想に立ってもらわないと困るという気がする。僕の感覚からすれば、女性がフェロモンを発しているか、色彩を発しているか、音波を発しているかを、分断して問うこと自体が、女性あるいは日本人の身体の仕組みではなく、西洋医学の循環に乗ったままだという気がする。女性は何も発していないといえばいないし、全てを発していると言えば、そうだ。それを受け取るのは我々男の主観（そして、その主観を規定する知覚のあり方、その土地の気候・風土・文化・言語）にかかっているのであって、主体である人が、西洋の自然科学的価値観が入ってくる以前の日本人男性の知覚能力をそのまま持っているならば、それによって自然現象や女性の月経といった「外の現象」をとらえているだけのことだと言わねばならないと思う。そういう観点を持っていないと、僕のような感覚を持つ男に対しても、女性に対しても、実は失礼に当たるのだという気さえする。

「フェロモンが、実在の現象か、そうでないか」という問い自体が、非共感覚者の知覚の範囲、西洋の自然科学の価値観の範囲で立てられたものだ、ということに、我々は気付いていなければならないと思う。そう考えてみると、「月経周期に色や音を見聞きする」という共感覚は、「文字に色が見える」だとか「音に色が見える」といった他の共感覚と同じく、共感覚者にとっては実在の現象であって、「女性はフェロモンを発している。その成分は何か。」というような問いのほうが、ある意味では女性への暴力になりかねないことなのだと、そこまで慎重になって考えてみたい。

「女性はフェロモンと呼ばれる何物かを発している」という見方は、共感覚を持たない科学者が、その知覚（五感）の中で考えたことであって、共感覚者の男性にとっては、フェロモンと言うか言わないか以前に、女性はあらゆる何かを発しているとしか言いようがない。だから、観測者の五感の違いによって、世界の見え方は全く違うわけだ。

こういう発想の転換は、僕は実に大切なことだと思うのだけれど、そこでまた、世間ではこれを「オーラ」だとか「天才的能力」と言ってしまうから、別の議論になってしまうわけで、僕はあえてそういうことを離れて、僕の共感覚を的確に皆さんに説明できるかということを、今はじっくり考えている。実に難しい。

そこで思い出したのが、日本にも中国にも見られた「香りを聞く」という言葉。いわゆる「聞香」（もんこう）。中国語の「聞」には、「嗅ぐ」「匂う」と「耳で聞く」の二つの意があるが、遡れば遡るほど、日本や東洋では、「嗅ぐ」と「聞く」とを区別しないことが、む

しろ人間の知覚の基本であったと思わせるような痕跡ばかり出てくる。

僕は学者ではない代わりに、自分の共感覚体験と直観でしか言えない（でこそ言いたい）けれども、「におう」という言葉に関して、今の日本人には「嗅覚を表す言葉である」としか認識されない、あるいは「におい」に嗅覚しか知覚しないことの、「非日本性」について、関心を向けてみたい。一方で、古語の「にほふ」となると、「姿が匂やか」だと言うときの「にほふ」、つまりは完全に人（異性）や物の姿（視覚・光・可視光）を表す言葉であると我々が学習させられるのも、全ては現代日本の、共感覚を持たない大多数の人間の知覚でのやり取りでしかない。つまり、「にほふ」が、ただの視覚でも嗅覚でもない、「ある知覚」を表している言葉であるというのが、僕の考えているところなのだ。共感覚者としての、この僕の実感なり直観が、どこまで正しいのかを探ってみたいというのが、今の本音だ。視覚と聴覚との間に、言葉だけでなく、知覚のレベルでも壁が存在しなかった時代を思い起こしたい。ここで僕が、無理にでも、我々の知覚が全て脳で処理されるということを信じるにしても、「可視光は、視覚野にも嗅覚野にも到達する」という知覚のあり方は、実はかつての日本人にとっては”難なく可能な知覚・日常的な知覚”であったと僕は思う。僕ら日本の共感覚者が、日本の非共感覚者や世界の人々に向かって指摘できることがあるとすれば、まさにこのことではないだろうか。いわば、日本人は、国民レベルで「一億総共感覚者」であった時代を持っていると思う。むろん、当時の人口は一億もいないが・・・。

本居宣長が言ったのは、「古事記が書かれた時の人の心を自分の心において追体験できないと、本当の古事記は読めない。古事記を解釈するのではなく、再び語ること、日本人を再発見することが大切だ」ということだった。共感覚も、これと同じことなのかもしれない。研究者は、「共感覚を発見した」と言う。しかし、その言い方は、我々の「万葉集」や「源氏物語」、短歌や俳句、三味線や茶や生け花の世界に言わせれば、間違いなくアウトだろう。もちろん、中国には中国の、フランスにはフランスの、アフリカにはアフリカの、互換不可能な、その民族と風土に固有の美しい共感覚があるはずだ。共感覚とは、結局、「人間の再発見」なのだというのが、僕の実感だということになると思う。おそらくは、それが、僕の普段のパトリオティックな発想と結び付いているのだろう。つまりは、僕の持っている共感覚・知覚のあり方は、かつての日本人男性の常識的な知覚と思考の中においては簡単に埋もれて隠れてしまうほど、むしろありふれたものだっただろうということに、個人的には期待と悠久の念を感じ取るし、それが自分で面白いのである。

それ以外にも、「ドミトリー効果」「井戸に石を投げ込む思考実験」「嗅診をこそ疑え」「原始男性には、月経は聞こえていた可能性があるのではないか」「世界祖語は存在するか」など、色んな視点を考えていて、自分では面白いし、全部説明してみたいものだけれど、とりあえず今日は、前置きだけにしておきたいと思う。

月経周期に色彩や音が見聞きされる共感覚②　「井戸に石を投げ入れる思考実験による説明を試みる」

2007 年 11 月 1 日　起筆、擱筆、公開

この特異な自分の共感覚について、より仔細な考察を試みるため、次のような思考実験を考えてみた。（この方法は、何もこの僕の感覚に限らず、また共感覚の強度にかかわらず、「文字に色が見える」といった一般的な共感覚者にも適用できる気がする。）

今、深さの分からない井戸の中に、一つの石を投げ込んで、水の音が聞こえてくるまでの時間によってその深さを測るとする。あるいは、水の音がするかしないかによって、井戸が枯れているか否かを判断してみるとする。このとき、人はどういう感覚を用いて、その深さを把握するだろうか。

なぜこの実験が思い浮かんだかと言うと、例えば、「定規で物の長さを測る」といった、視覚情報のみから言語化・記号化を試みる判断と違い、「音が返ってくるまでの時間（聴覚）によって距離（視覚）を測る」という、ある意味では、「非共感覚者にとっても、すでに分かりやすい共感覚的な判断を含んで」おり、説明しやすいと感じるためだ。

ただし、「女性の月経に、その人固有の色と音が遠隔から見聞きできることがある」などという僕の共感覚は、「文字の形に色が見える」「音に色が見える」といった、一般的な（とは言っても、非共感覚者からはすでに信じられないかもしれないが）共感覚と異なり、倫理道徳上、扱いが難しい共感覚であり、それだけに別の覚悟が必要だけれども、僕が体験者として書いたことは、僕自身に対しても一つの宝となることを願って、書いていきたい。僕の直感と目的は、共感覚者と非共感覚者との差異を明確にすること以上に、僕自身の共感覚そのもの、そして（思考や言語能力には全く障害を持たずに生まれながら、知覚だけは、原始日本人男性の知覚世界、今の知的障害者の男性たちの知覚世界、自閉症者の知覚世界、子どもの知覚世界と等様態にあるのではないかという）20 数年の実感を、せっかくメールなどでご質問下さった女性の方々に、できる限り説明することにある。（ただし、こういう感覚が今の社会で役立つかどうかは、完全に別問題であることは、了解していただければ嬉しいです。事実、こういう感覚は、ほとんど自主的に抑圧して生活していると言ってよいです。これは、他の多くの共感覚者が日々感じている悩みと違うものではないと思っています。）

さて、石を投げ込んだときに聞こえてくる音は、「ポチャン」や「トン」といった音だろうが、ここで多くの人は、おそらく「聞こえてきた音（音波）」を、自分とその音源との距離感、音が返ってくるまでの時間、音像の様態、残響の程度などから、それらを言語化・記号化し、自覚するか、人に伝達しようとする。これは、「今の音は、どのくらいの深さで鳴った感じがするから、およそ何メートルだ。」という、ごく一般的な判断の仕方であり、共感覚者・非共感覚者の別にかかわらず、我々人間が日常的に用いている感覚だということになる。この知覚様態は、非共感覚者が日常的に最も多用している、常識的な知覚様態だと思われる。

今、こういった知覚様態を、(B）と名付けるとする。すなわち、この知覚様態（B）には、今言ったような「音の跳ね返りで、およその距離を測る」判断も含まれるし、例えば、何かの試合で、「この笛は、50m の距離で吹いたらこの音量で聞こえるから、100m 先ではどのくらいの強度で吹けば両チームに聞こえるかが直感的に分かる」というようなものが含まれる。つまり、「聴覚によって視覚的な事象を判断する」「視覚によって聴覚的な事象を判断する」といった、「非共感覚者でも、日常でごく普通に用いることがあるような共感覚的な判断」のことを、今、(B）と呼ぶことにする。

一方で、冒頭に挙げたような、「定規で物の長さを測る」といった、人間以外の動物が用いることのない、五感分断的な技術媒介による知覚判断を、今、(A）と置く。これはつまり、「(いわゆる非共感覚者が、普段当たり前だと思って疑わない）五感」を相互にまたぐことのない、事象の認識方法であり、言語と科学技術を獲得することで事象認識の抽象化・記号化を推し進めた人類の大脳皮質にのみ統合可能であるような、「見たものは脳の視覚野へ、聞いたものは脳の聴覚野へ」という、後言語的・各感覚様相（五感）分断的な知覚様態だと言える。

まとめると、以下のようになる。

●（A）井戸の深さを、実際にメジャーなどを下ろして測ってみる。（目で見る→視覚を得る）
●（B）井戸の深さを、石を投げ込んで、水の音が返ってくるまでの時間と距離感によって測ってみる。（音を聞く→距離感をつかむ→視覚情報（何メートル）を得る）

たとえ非共感覚者であっても、(B) を思い付く人は、多くいるだろうと思われる。この (B)

の方法を思い付くかどうかが、脳のレベルで、日常的にどのくらい言語的・記号的抽象概念に依拠した知覚世界を生きているか、反対に、どのくらい共感覚的知覚世界を生きているか、それをある程度は判断できる基準になるだろうけれども、かと言って、（A）と（B）を提示されれば、両方とも何を言っているのかは、非共感覚者と言えども、きっと分かると思う。

さて、井戸に石を投げ込んだとき、「今の音は、返ってくるまでの時間が、どの程度の薄い紅色だから、何メートルだ」とか、「今の音は、どういう曲線状の、その程度の深緑色だから、そんなに深くない」といった判断をする人がいる。これが、僕を含めた、共感覚者の知覚様態であるということになるだろう。これ以降は、共感覚者だけが直感的・体験的に理解できる知覚世界だということが言えると思う。この知覚様態を、（C）と置くことにする。つまり、「文字に色が見える」「音に色が見える」「匂いに形がある」といった、いわゆる「共感覚」が（C）だということになる。

●（C）井戸の深さを、石を投げ込んで、水の音が返ってくるまでの時間と距離感を色で聞くことによって、測ってみる。（共感覚者しか発想しない方法だと言える。）

これらをまとめると、以下のようになる。

●（A）人間の後言語的知能、脳機能局在的・大脳新皮質的な記号化・抽象化能力が成すものである。
●（B）現代人の多くがいまだ残している五感混交的・前言語的・動物的感覚の一つと言える。（A）と（B）は、共感覚者・非共感覚者にかかわらず、日常的に用いている。ただし、（B）も、「思考」の範疇であって、「知覚」レベルでの混交ではない。
●（C）共感覚者の知覚。前言語的・不随意的な知覚能力であり、人間以外の動物の知覚様態及び、人間の胎児期・幼少期の通常的な知覚様態は、これであると言われる。

↓↓

（C）の知覚体験が直感的・体験的に分かるかどうかが、今のところ学術的な意味での共感覚者と非共感覚者とを分け隔てていると思われる。

↓↓　同様に、「女性の月経周期に色彩や音を見聞きすることがある」という僕の共感覚を、(C) に適用する。そうすると、(A) (B) には、どのような文章を入れることができるだろうか。

●（A）月経周期を、基礎体温を測ることにより、視覚的に数値で把握する。
●（B）月経周期を、女性自身が皮膚感覚・内臓感覚・子宮感覚などの体性感覚や体調の変化を自ら感じ取って把握する。あるいは、月経時に発する特徴的な匂い（嗅覚）や、視覚上の変化（顔色など）によって、第三者が判断する。ここには、「嗅覚→聴覚」「聴覚→視覚」といった五感混交的な知覚判断はない。
●（C）月経周期を、「あの女性からは、28 日周期で、青い音と赤い音とを行き来するのが見聞きされる」だとか、「あの女性は、肩辺りに琥珀色の帯を感じるから、今回は調子が悪いだろう」といった共感覚によって把握する。

この（C）は、同じく（C）に当てはまる他の様々な共感覚と、まさに同等であると思っていただければ、おそらく少しはうまく説明できたことになるだろうか。

今、「物の長さを定規で測る」ことと、「女性が自らの月経周期を、基礎体温を付け続けることで把握する」こととを、僕は人類進化・胎児発育における知覚様態の脳レベルでの変化過程の上で等位置と見て、(A) と名付けた。（これを「進化」と呼ぶことが正しいかどうかという議論も、あると思う。「知覚」においては、むしろ「退化」とも言える。）　これはすなわち、動物がヒトへと移り変わる過程、子どもの知覚が大人の合理化・言語化された知覚へと移り変わる過程、古代人の知覚世界が現代人の知覚世界へと移り変わる過程などにおいて、様々なとらえ方ができるが、当然ながら、人間以外の動物が、定規を使って物の長さを数値で測ったり、排卵日を数値化された体温で測るなどということはない。女性自身でさえそうであるから、我々男性にとっては、なおさら完全に「蚊帳の外の現象」である。しかし、この「蚊帳の外の現象」を、本来男（オス）は、数十万年もの間、遠隔から何をもって感知していたかということになる。要するに、有史以降の年月の数十倍に当たる有史以前の時間、人間の男が、どういう知覚で、何をやっていたかということは、大変に興味深い。

いわゆる寄宿舎効果（ドミトリー効果とも。同じ部屋にいる複数の女性は、次第に月経周期が似通ってくる）などでも知られるように、女性同士でも、女性のフェロモンは気付かないものであり、無臭の化学物質であるとされ、つまりは、「目に見える」現象がフェロモンの存在を物語っているという言い方しかできない。だからと言って、オスがそれを感知

するときに、「嗅覚で感じません。基礎体温を、ちゃんと数値で教えて下さい。」となるのは、人間のオスだけだ。そこから考えてみても、メスの体調の変化を、視覚でも聴覚でも嗅覚でも不随意的に察知してしまうのが、むしろ動物のオスの脳と体に組み込まれた知覚様態であったとしたら、むしろ「フェロモン」という概念自体が、それこそ（A）や（B）の知覚しか持たない男性が、主観的・五感分断的に女性を見て考え出したものにすぎないことになる。つまり、フェロモン自体が、すでに客観的実在と言うよりは、女性の身体現象の一部を見て、他の現象を捨象する、それこそ先入見的・主観的な機械論的女性身体観ではないのか。「女性が発しているものは、フェロモンなるもので、それは化学物質である」などと、本当に圧倒的多数の科学者が信じているのだろうか。女性がフェロモンを発しているのなら、同じく色彩も音も発しているのではないかという実感は、やはりこういった前言語的知覚を持つ男性からしか出ないものだろうか。この点が、僕の思う、長年の不思議だ。

ただし、フェロモンの存在を否定しているのではなく、僕が言いたいのは、「共感覚者の男性にとっては、女性が発しているものは、そんなものではない。フェロモン研究もいいけれども、それだけだと思わないほうがいい。」ということなのだ。

この僕のとらえ方が、共感覚者としての 25 年間の体験からの直観として正しいとするならば、「女性の月経周期に色が見えたり、音が聞こえる僕の感覚」は、「井戸に石を投げ込んだときに、その音を色で判断している共感覚」と、脳進化的に等位置にあると考えられる。つまり、歴史上のどこかで、オス全体が「文字に色を見たり」「メスの体調に色と音を見聞きしたり」していた「ある時期」の知覚世界、オス全体が共感覚者でありアスペルガー症候群的であった「ある時期」の知覚世界と同じ世界を、僕は見ているのではないかということを、しきりに考えるようになった。

「文字に色が見える共感覚は、井戸に投げ込んだ石が落ちる音を、色で聞くようなものだ」という僕の説明の仕方は、おそらく共感覚者なら、直感と体験で分かっていただけるかと思う。そうであるならば、僕の「女性の月経周期には、その女性固有の色彩があり、音がある」という感覚は、まさに井戸に石を投げ込んで音に色を見ているようなものだ。この喩えは、おそらくは全共感覚者の８割程度を占める女性にとっては、直観で分かるのではないだろうか。もしそうであれば、僕の説明が成功したことになると思う。この感覚の仕方、まさに先の（B）と（C）の違い、非共感覚者でもかろうじて残している共感覚的な感覚と、共感覚者の日常的な感覚の違いが、鍵を握っているのではないだろうか。

関連する記事

http://ij-art-music.sblo.jp/article/6266089.html
http://ij-art-music.sblo.jp/article/5604599.html
http://ij-art-music.sblo.jp/article/4759604.html
http://ij-art-music.sblo.jp/article/6216409.html

女性共感覚者の体質について

2008 年 1 月 10 日　起筆、擱筆、公開

昨年の 6～12 月にメールを下さった共感覚者の女性及び、当ブログの質問コーナーにご質問を下さった非共感覚者の女性から頂きました体験談を載せています。もし同じようなことで悩んでいる方がいたらと思い、書いてみました。（確認が取れていない方は省いています。少しずつ付け足していきます。）

当ブログ宛てにメールを下さった女性の内訳
共感覚者 9 人
閃輝暗点者 13 人
両方持ち 3 人・・・私管理人（男性）も両方持ちです。

（共感覚者、閃輝暗点者、両方持ち）の順。
私管理人（男性）が持っている感覚には、★を付けておきました。

●年齢
　○10 代（1、2、0）
　○20 代（6、5、3）★
　○30 代（1、2、0）
　○40 代（1、0、0）
　○50 代（0、1、0）

●出産経験
　○有り（2、2、0）
　○無し（7、8、3）

●化学繊維や金属など、触れたり近づくと肌や体調に何らかの異常が出るものについて

○特定の繊維の衣服・毛布・セーター（3、2、2）
☆吐き気がする、「オエッ」となる（2、2、2）★
☆暑くないのにあぶら汗が出る、肌が荒れる（1、2、1）
（また詳細が分かれば、ぜひ聞かせて下さい。）

○エアコン（1、0、0）
○特定の金属（1、1、0）
○自動ドアセンサー（6、7、3）★
（メーカーなど分かれば教えて下さい。）

○特定の化粧品（2、2、0）
○特定の靴（1、0、0）
○ダンボールのそば（2、1、1）★
○セロテープ・ガムテープ（1、2、1）★
（天然素材だとは思うのですが、僕にも心当たりがあるので、粘着部分の成分など調べたいものです。）

○エレベーターの幾何学的な加速・減速（1、2、2）★
（僕もよく分かります。どこのメーカー、どこのデパートなど分かりましたら、聞かせて下さい。）

○コンセント式ネコよけ機器のそば（1、1、0）★

●自分の生理周期に色彩と音楽を感じる（1、－、2）

●色々な感覚
○髪形を変えたら共感覚が強まった気がする（1、－、0）
○部屋の模様替えで、まっすぐに置いていないと気が済まないものと、ななめ向きに置いていないと気が済まないものがある（0、0、1）
○出産して共感覚の質が変わった（0、－、1）
○入浴のとき、左足から入らないと違和感を感じるので、間違えたら入り直す（0、0、1）
○小さな音にもびっくりしがち（0、1、1）
○地震の前に耳鳴りがする（1、0、1）
○地震の前に胸が苦しくなる（1、0、2）
○自動車免許を持っていない（4、4、2）

（衣服の着脱、髪の洗い方、玄関の入り方、靴の履き方など、共感覚に関連する何らかのこだわりがあるという方がいらっしゃれば、聞かせて頂ければ嬉しいです。）

●自分の共感覚や片頭痛（閃輝暗点）についての、家族・友人・恋人・医師などからの発言・対応

〇医師やカウンセラーの誤診・不適切な薬の処方
☆薬で共感覚が狂った（1、－、1）
☆薬で生理が狂った（1、1、1）

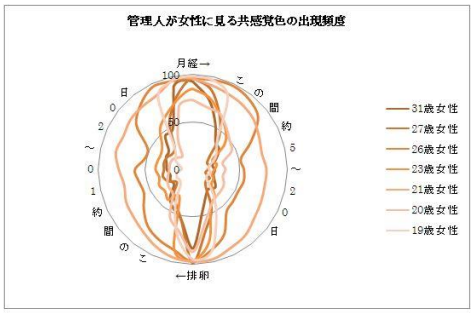
〇不適切発言
☆相手が共感覚、閃輝暗点を知らなかった（3、0、1）
☆共感覚が理解されなかった（1、－、1）★
☆自分も共感覚、閃輝暗点を知る前だったため、自分の精神の問題だと思ってしまった（2、0、2）

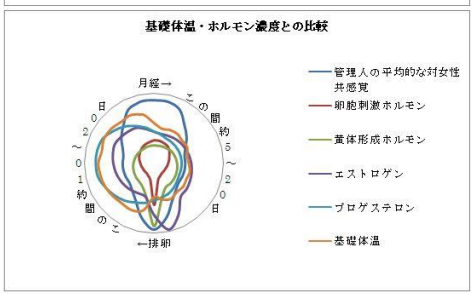
●全く（またはそれほど）抵抗なく理解された（5、5、1）

※当ブログの性質上、はじめから特定の感覚や悩み、関心をお持ちの方が集まる場だと思うので、参考までにどうぞ。しかし、僕としては、個人的に納得・共感できるものばかりでした。

対女性共感覚　～実証され続ける東洋的な女性身体観～

2009 年 4 月 17 日　起筆、擱筆、公開





現在のところ、対女性ミラータッチ共感覚も、女性の排卵や月経を遠方から感知する共感覚も、僕は全てを合わせて「対女性共感覚」と呼んでいて、まだ海外でもこれに該当する共感覚の直接の呼称は存在しないと思いますが、個別には色々と研究が進んでおり、こういう男性が存在することへの知識は、確実に生理学者の間にも浸透しつつあります。時代も変わったもので、このまま一定の倫理を保った中で、よい方向に研究が進むことを願っています。

ここでは、私や一部の対女性共感覚者男性のそういった「言葉にならない」「ただの空想だと思われがちな」現実の体験が、思わぬところで学術的に実証されてしまったことなどを載せていきます。

【卵胞波（follicular waves）という新しい概念】
【自由意志と排卵感知】
【チーターのオスの能力】
【対女性ミラータッチ共感覚】
【周期排卵と交尾排卵】

【卵胞波（follicular waves）という新しい概念】

私が女性の排卵を遠方から感知するときの実感として、排卵とは「卵子を排出すること」

ではなく、「女性の身体（内性器）を構成する様々な分子（あるいは波動とでも言うべきもの）の一部が、妊娠可能な状態に収束しようとしている現象を、共感覚を持たない一般の人の五感で観測可能な“卵子”という一定の形状に押し込めた記述」にすぎないというものがあります。極端なことを言うと、卵子という「モノ」が「有る」状態と「無い」状態は極めて連続的なものとして私には知覚されていて、「排卵」という現象自体、私は「ある」とは知覚していないのです。

ある意味では「卵子というモノそれ自体は存在せず、空（くう）である」などと仏教的な言い回しになるしかない、この対女性共感覚の実感は、2003 年のある論文によって、光を見ることになりました。従来の「排卵」や「月経」とは異なった「卵胞波」という概念です。女性の排卵と非排卵の時期とを分けることは、本当は不可能であるということが、この論文以降、言われ始めています。ほとんど東洋医学的・仏教的な女性観になってきています。

実は、私が持っている対女性共感覚は、「正常に排卵しているのに、全く子どもができない夫婦がなぜ存在するか」、あるいは「排卵期間ではないのに、なぜ妊娠することがあるか」という疑問を、簡単に解いてしまいます。「そもそも女性には“排卵”という現象が存在するか」、「五感で見ている”卵子”は、本当にヒトの初期の姿か」ということから疑うわけです。それは、ひいては、「“卵子”という五感で観測可能な物体の実在は、対女性共感覚者男性にとっても本当に絶対的なものと言えるか」という疑いをかけるのと同じことです。

ある女性の排卵を感知するときに見える共感覚色が、その女性の排卵期以外の時期にも見える確率は、少なくとも私の場合、完全に 0 にはなりません。月経期間に至っては、排卵期と同じ高頻度で色が見えます。ほとんど文字や音に色が見える共感覚に匹敵します。
（参照：http://www.ij-art-music.com/ronbun_ippan/seiteki_bassui1-6.pdf
ユーザー名、パスワードはトップページに記載。）

そのため、しばしば「あなたは、女性の排卵や月経に色を見ているのですか、それとも女性そのものに色を見ているのですか」などと不思議そうに聞かれます。確かに、もし排卵や月経だけを感知しているのなら、その時期だけに特別に強い色が見えて、あとは見えなくてもおかしくないはずです。

しかし、実際は「自分が共感覚で見ているのは、確実に女性の卵巣・卵管で起こっていることであるのに、その全てを排卵そのものだと言うことには抵抗がある」という奇妙な違和感があります。対女性共感覚で女性を見ていると、「排卵しているのに排卵していない状態」や「排卵していないのに排卵している状態」というのがあるように見えます。私が普

段「排卵」と言っているのは、「排卵している排卵」とでも言えそうです。これは、女性から見ても奇妙に思われるかもしれませんが、一般の共感覚において、「どちらの文字にも確実に色が見えるのに、どちらかの色が薄いこともまた確実である」といった実感が一般の人に理解されにくいのと全く同じだと思います。

そこで、女性の排卵に関して、以下の論文で「卵胞波」なる概念が提唱されたわけです。
（Baerwald A, Adams G, Pierson R　"A new model for ovarian follicular development during the human menstrual cycle."）
（ウィキペディアの以下の箇所に分かりやすく要約されています。）
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%8E%92%E5%8D%B5#.E6.96.B0.E3.81.97.E3.81.84.E7.A0.94.E7.A9.B6.EF.BC.9A.E5.8D.B5.E8.83.9E.E6.B3.A2

これが本当に正しいとすると、まずは、私が「対女性共感覚」と呼んでいる感覚は、実は「排卵」や「月経」というよりは「卵胞波」を感知しているのではないか、という可能性が出てきます。「排卵している状態」と「排卵していない状態」とに厳密な境界線はないという実感は、ある意味では仏教的で東洋医学的な女性観です。「排卵→月経→排卵→月経」といった従来の女性の身体の解釈そのものが本当に正しいのかということさえ考えさせます。排卵や月経とは、女性の生理現象の末端の記述にすぎないということだと思います。

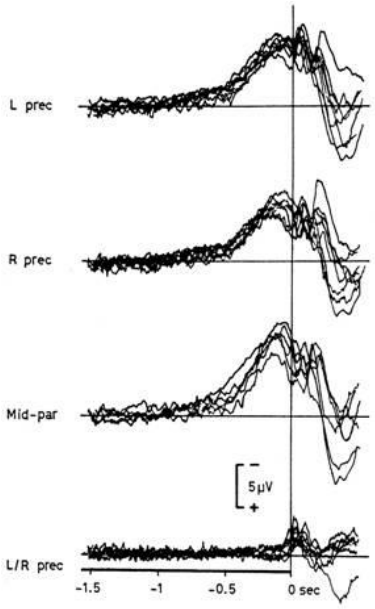
ただし、「対女性共感覚は卵胞波の感知能力だ」と言いきってしまうと、これまた同じことで、再び説明しきれない不都合なところが出てきて、今度は「卵胞光線」や「月経波」などといった、新たな概念が学説として生まれるに違いありません。しかし、これらとて学説よりも先に、今すでに対女性共感覚の実感に含まれています。むしろ、「卵胞波」が許されるなら、「子宮波」や「月経光線」や「排卵音波」という言葉も作ってほしいくらいです。

それを考えると、対女性共感覚というのは、そもそも現行の科学とは別の次元の、「もう一つの（と言うよりは、より根源的な）女性の身体の説明の仕方」としか言いようがないのかもしれません。対女性共感覚は、現行の用語で名指しすることによって近似値としては「言及」できるけれども、それ自体を「観測」することが不可能である点で扱いが難しいのだと思います。近似値を狙って言語化していく以外にない現状は、共感覚者全体の悩みですが、何かよい案があれば、ぜひご教授下さい。

【自由意志と排卵感知】

以前、対女性共感覚は「能動でも受動でもない、何とも言いようのない意志による感覚だ」という内容のことを書きました。
（参照：http://ij-art-music.sblo.jp/article/26581996.html）
それは一つには、「対象とする女性の排卵を知りたい、知ろうと自分が意図する、あるいは意図した自分を意識するよりも少し前に、自分はすでに女性の排卵を完全に感知している」という実感から来ています。

我々は普段、自由意志・随意によって行う行為とそうでない行為とが、完全に分かれているかのように生活しています。ある意味では、現代日本人も西洋的な人体観や自然観に慣れ切ってしまいました。ただし、「人間に自由意志はあるか」という問いは、いつの時代も投げかけられてきました。仏教では、「有るか、無いか」という問い自体を退けるようなところがあり、最初から私のような対女性共感覚者の男性にとっては「男の真髄を突いてくれている」思想なのですが、ここでは思想・哲学的な話は横に置きましょう。



そして、近年になって、人間の自由意志の常識を破る結果が出ることになったわけです。ドイツの神経生理学者ハンス・H・コルンフーバー、リューダー・デーッケ、アメリカの神経生理学者ベンジャミン・リベット、スペインの神経生理学者アルバロ・パスカル・レオーネなど、すでに多くの学者によって検証されています。これは、「女性の排卵を感知しようと思ったときには、すでに感知できている」という私の奇妙な実感を、いとも簡単に説明してしまい、むしろ驚いてしまいました。

例えば、ベンジャミン・リベットは、被験者に好きなときに手を曲げてもらい、本当に「手

を曲げよう」と被験者が意図した（意識した）瞬間以後に脳活動が始まるかどうかを調べました。その結果、「手を曲げよう」と思った時点のおよそ 0.3 秒以上も前から、すでに「手を曲げる」ことが決定されていることを発見しました。（右図参照）

アルバロ・パスカル・レオーネは、動かす手を被験者に自由に選んでもらうという実験を行いました。右利きの人は、だいたいは 6：4 の割合で右手のほうを多く動かします。ところが、左手をつかさどる右脳を刺激しながら同じ実験を行うと、2：8 の割合で左手を選択するようになり、しかも被験者は自由意志によって左手を動かすことを選択している（ように自覚される）ことを発見しました。

コルンフーバーらが行った実験でも、同様の結果が出ています。コルンフーバー（コーンヒューバー）やリベットの実験は、共感覚の書籍『共感覚者の驚くべき日常』（シトーウィック、2002）でも紹介されています。

そこで、女性の排卵を感知するという私の能力にも、途端に光明を見出せることになります。「排卵を感知しているのは、まさにこの自分であり、自分がそう意志したから、そうなっているのだが、しかし、その感知自体は、私が決めたことではなく、オスの能力として最初から組み込まれていて、それを発揮しているだけだ」という実感は、極めて正しい実感の記述であると言えます。もちろん、これは対女性ミラータッチ共感覚についても言えることです。「遠方から目視しただけで女性を触ることができる」のは、「自らの自由意志ではあるが、すでに”自然現象として”自分の中の何かによって決定されている」からだと言えてしまいます。「自分の主観は、オスの客観だ」という対女性共感覚に独特の確信は、実は大変に正確な「自覚の仕方」であると言えます。

共感覚は、子どもの頃なら皆持っていた知覚世界、あるいは人間が潜在的・無意識的には今でも知覚しているかもしれない世界を記述したもので、共感覚者はそれを意識の上に乗せて日常的に体験できる人たちである、という言い回しは、もはやありふれていて、当り前の言説になってきました。これを時間軸に乗せて考えれば、共感覚者とは、「自由意志を自覚するよりも前から自分の身に起こっていることを知覚できる（図の中の、0 秒よりも前の電位に該当する部分を意識の上で体験できる）」存在であると言えるかもしれません。

同じく、排卵の感知で言えば、「あと 0 点数秒後に、自分は対象とする女性の排卵を共感覚によって感知するであろう」ということが言えるわけで、そしてこれは、私の実感そのものなのです。

何度も書きますが、「女性の排卵や月経を遠方から感知する能力は、必ず共感覚である」と

いうことは重要です。ですから、自由意志を自覚した瞬間よりも前の自分の「動き」を知るには、まず自分が共感覚者でなければなりません。まさにその点が、圧倒的大多数の男性が失ったオスの能力なのだと思います。

【チーターのオスの能力】

私には、「自分の目線や声、身振り手振りなどが、女性の卵巣・卵管・子宮に影響を与えているのが見える」という、数十年間も向き合ってきた感覚があり、今も持っています。そしてこれも、思わぬところから実証されてきているのが興味深いところです。

最近では、チーターのオスの能力が注目されました。チーターのオスが鳴き声でメスを排卵させることができることが証明されたというものです。実際にこの方法で繁殖まで行われて、ヒトの男性でもそういうことはあるということが、おそらくは近い将来、認められると思います。

http://www.nationalgeographic.co.jp/news/news_article.php?file_id=81122945
（オスのチーターの鳴き声が排卵を誘発）
http://www.nationalgeographic.co.jp/news/news_article.php?file_id=16130945
（オスの鳴き声でチーターの繁殖に成功）

対女性共感覚の場合、女性の排卵を常にコントロールしているわけではなく、ほとんどは感知しているだけなので、チーターのオスよりはずっと「受け身」です。ただし、対女性共感覚も、「能動と受動の間、意志と非意志の間」としか言いようのない感覚がすることは確かです。

何より重要なのは、チーターのメスがオスの鳴き声を「音波」として聞いていると断定する根拠はどこにもないということに、共感覚者ならすぐに気付く点かもしれません。繁殖に成功した事実が示すのは、チーターのオスの「鳴き声」がメスの生殖器に作用したということのみで、メスがオスの鳴き声を「聞いた」ことではない点には注意すべきだと思います。

【対女性ミラータッチ共感覚】
（この共感覚は、以下にも詳しく説明しています。

http://ij-art-music.sblo.jp/article/28421256.html
http://ij-art-music.sblo.jp/article/4692845.html
http://www.ij-art-music.com/mirror.pdf）

特にスカートや夏服など、女性が下腹部や肌があまり覆われない服装をしている場合、対女性共感覚者男性は、直接的に女性の肌に接触したときと同じ触覚を遠方から得る場合があります。倫理的に見て最も扱いが難しい共感覚でありながら、日本人男性には報告者がけっこういて、私もサイトで何度か他の男性のサイトを紹介していて、今も一つリンクしています。

基本的には、目視した女性の身体部位と、触った感覚が得られるそれとは、同じです（女性の頬を見ると、頬を触った触覚が生じる）。ただし、体験者本人にとっても不思議なのは、女性の着ている衣類を突き抜けて接触できてしまう場合があることです。ですから、下腹部を衣類の外から目視しただけで、実際に下腹部に触れた感触を覚えます。これは、それまでの実際の接触体験の有無に無関係です。ということは、男性の知覚能力には、最初から女性の各身体部位を欲求する共感覚的な触覚が備わっているということでもあります。

また、この共感覚が、「触りたい自由意志」によるのか、「触ってしまう受動性・不随意性」によるのかについては、先の【自由意志と排卵感知】での話と全く同じです。「すでに決定付けられた自由意志」とでも言うべき意志によって触っているとしか言いようがない実感を伴います。対女性共感覚者の男性にとって、そもそも「女性に触れる」ということには二種類あります。一つは、一般男性と同様の「直接の接触」、そしてもう一つが、「共感覚による接触」なのです。

共感覚のうち、第三者が対象者を触っているのを見て自分が対象者を触っているのと同じ触覚が生じたり、第三者が対象者に触られているのを見て自分が対象者に触られているのと同じ触覚が生じたりする共感覚は、「ミラータッチ共感覚」と呼ばれています。

第三者を介さずに対象者の身体部位を目視するだけで触ることができるケースや、第三者が動植物や物体であるケースも、同じようなものと言えますが、こちらは「ミラー」という名称では呼べないので、今後新しい名称が出てくるかもしれません。

これらの共感覚は、海外の研究者による多くの実験によって、実証されました。以下が代表的な論文で、ここでは「頬」への刺激を用いた実験になっています。

http://home.comcast.net/~sean.day/banissy%20&%20ward%20published.pdf

そのうち、女性を目視しただけでその外性器や胸部に触れた触覚を覚えている男性が本当に存在するということも、簡単に証明されるでしょう。しかし、それには今の倫理を破るような実験が必要になってしまいます。私は、そういったことにはやはり賛成できません。むしろ、この共感覚を持つ男性自身による知的な告白が全てであってほしいと思います。アメリカなどでは、そういった実験も今後は行われていくのかもしれません。

【周期排卵と交尾排卵】

「卵胞波」の項でも書きましたが、私が女性の身体に共感覚で見聞きしている周期には、「排卵」や「月経」といったものが、ある意味では存在しません。無理に「排卵」や「月経」という、一般男性の女性身体観に妥協して合わせて、そういう言い方をしているだけで、私が女性に見ているのは、「自分はこの女性を今、妊娠させることができるかできないか」という、純粋に動物的で非五感的な生理現象の情報です。

周期排卵（自然排卵）動物とは、メスが周期的な卵胞期の終わりに排卵をする動物で、ヒトやサルの他、多くの哺乳類はこれに分類されます。交尾排卵動物とは、オスとの交尾による刺激によってメスが排卵する動物で、ネコ・イタチ・ミンク・テン・ウサギなどがそうです。

しかし、サルのメスでも、オスとの交尾によって排卵が誘発されることは普通ですし、何よりヒトの女性についても言えるのは、配偶者の男性の命の危機を感じた女性は排卵期でなくても妊娠することで、第一次・第二次世界大戦中に兵士が一日休暇をとって帰郷したところ、排卵期でない女性の妊娠が確認されたそうです。真珠湾攻撃のニュースが流れてから約 10 カ月後には、アメリカ人女性の出産ラッシュが確認されたようです。(『三人目の子にご用心！　―男は睾丸、女は産み分け』竹内久美子、文藝春秋、1998)

そうなると、対女性共感覚も、女性の排卵をどうしても感知しなければならない状況（「自らの死」や「種の保存の危機」）に追い込まれたときには、今でも一部の男性には蘇る感覚なのかもしれないと思ってしまいます。

危機的状況において、女性は太古の交尾排卵に戻ろうとする。男性もそれを助けて対女性共感覚を発揮する。そういう雌雄の「歩み寄り」が日常的に実感されているのが、ヒト以外の動物なのかもしれないと感じます。

見方を変えると、日常的に対女性共感覚を有する私は、「戦争中の兵士と同じ生物的・心理的状態に今でも日常的に生きている」ということが言えるのかもしれないと、少し複雑な気分になりました。

私は戦争は望みませんが、例えば日本の特攻隊員が近い死を覚悟したときに妻や恋人、他の日本人女性に対してどういう性的能力を持ったかということについては、やはり関心があります。そこでは、かつて我々男性が「オス」であった頃に共有していただろう「性欲と生殖行為の一致」が見られるはずだと思います。

第六部　『私には女性の排卵が見える　共感覚者の不思議な世界』（電子書籍版を含む）

岩崎純一 著
2009 年 6 月 3 日　起筆
2011 年 5 月 30 日　出版、発売
新書本及び電磁的記録（電子書籍用各データ）
書店、電子書籍販売サイト、出版社、国会図書館、公立図書館
有料（国会図書館、公立図書館を除く）
幻冬舎
幻冬舎新書
ISBN 978-4-344-98213-0
著作者が出版社に権利の一部を譲渡
著作者及び著作権者への問い合わせが必要

目次
■序　この本で告白する私の感覚
■第一章　この性的感覚の特徴

感覚が最も鋭かった幼少期/五歳頃から十二歳頃まで、「二重人生」の始まり/「美しさと表裏一体の苦しさ」に悩んだ十三歳頃から十八歳頃まで/十九～二十歳頃、女性の色を書き留め記録を始めた/「共感覚」という概念に出会った二十一～二十二歳頃/他者と共有できるようになった二十三歳頃から現在まで/子孫を残してくれやすい年代の女性に対して発揮

■第二章　この性的感覚の探究に向けて

この感覚を何と名付けようか/この性的感覚を証明するとしたら/「共感覚」との出会い/幼児における共感覚の普遍性について/目視のみで女性に触ってしまう感覚の扱い/オーラ・ブームに対処した日々/「排卵」「性器」という言葉がない時代/「昔の日本女性にできていたこと」に頼ってみよう/私が自分の性的感覚に対して持っているべき姿勢とは

■第三章　男女の体の仕組みから私の性的感覚を考える

私は女性の何を感知しているのか/想像妊娠/動物のオスの性的能力/周期排卵と交尾排卵/卵胞波/初潮の低年齢化と精通の高年齢化/フラットなオス/性同一性障害や同性愛と私の性的感覚との対比/性染色体との関連/「共感覚」の概念にも少し不満を持った私/一般男性がこの性的感覚を得るとどうなるのだろう

■第四章　昔の日本男性の女性観から私の性的感覚を考える

和服と私の性的感覚との心地よい関係/上古代日本の女性の装身具・身体加工の意味/ネイティブ・アメリカンと鳥居/「人を思いやる」とはどういうことか/歌舞伎の女形・和歌の代理詠/日本文化研究者による「共感覚」研究の質の高さ/「一脳一自我」の不安定さ/自由意志/ラプラスの悪魔/禅と私の性的感覚

■結　私の性的感覚のこれから

■主な参考文献

日本の共感覚者女性の初潮に関する研究

2009 年 7 月 12 日　起筆、擱筆、公開

サイトに「日本の共感覚者女性の初潮に関する研究」を載せました。今年の 2 月には完成していたのですが、在野での個人研究とは言え、より精度を増したかったので、曖昧な被験者を苦しいながらも除きつつ、ここまで引っ張りました。(パスワードはサイトトップに。)

http://www.ij-art-music.com/ronbun_ippan/shocho.pdf

「共感覚は、昔の人なら誰でも持っていた」ということは、研究者も薄々気付いていて、自分たちが発見したかのように平気で言うわけだけれども、実は実証的にそれを導き出すことはしておらず、それならば何か自分で導き出してやろうと決心して、数年前から色々

な女性にご協力いただいてきました。本当に嬉しかったです。

もし僕の研究が妥当なら、「昔の日本人女性は、皆、共感覚者であった」ということが実証的に示唆されたことになるし、それで今の共感覚者女性が勇気を持ってくれたら、それほどの喜びはありません。しかし、これも僕の共感覚研究のほんの一部に過ぎません。

男性の場合も、「昔の日本人男性は、皆、対女性共感覚を持っていた」ということが言えるのですが、データが少なすぎて、まだ公開に値しません。

今後とも続けていきたいので、今までにご協力下さった（お会いした）共感覚者女性の方以外に、情報提供が可能という方は、よろしくお願い致します。

それから今日、サイトのデザインを少し変更しました。

薬物と共感覚の関係から見えてくること

2009 年 8 月 6 日　起筆、擱筆、公開

（ここで言う「薬物」とは、薬物四法により規制される薬物と、実際には薬事法違反となる脱法ドラッグの全てを指します。）

（8/8 追記）

一昨日は、この同じ記事の下方に薬物と共感覚についての、私の意見を書いてみました。独特な見解かもしれませんが、どうぞご覧下さい。おそらくは今後とも、共感覚の書籍や論文を読んでいれば、出くわさざるを得ない、これら薬物の話です。目にしたくない数々の単語で、ブログが汚れてしまったのは残念でなりませんが、一応、共感覚という、薬物と無関係ではあり得ない内容を扱っている者として、常に気にしてきたことであり、特にここ数日は大変に憤っておりますので、書いておきます。私のサイトを見て、「薬物を使えば、このような共感覚が得られるのか」と勘違いする愚かな人が一人も存在しないことを願うしかありません。

私は、共感覚関係で交流のある専門家との間でさえ、薬物の話題が少しでも出たときには、一昨日のような内容を述べさせてもらっています。

人として然るべき品性と教養とをもって真面目に共感覚に生き、共感覚の研究に取り組んでいる人たちにとって、薬物使用者の愚かな行動は、大変な迷惑となっていることを、今一度確認しておきましょう。

「共感覚者は、人としての品性の面でもしっかりしているのだな」と言われるような生き方を、真の共感覚者どうしで実践していきましょう。薬物による症状の記載においては、「共感覚」の語を使用することが禁じられれば良いとさえ、私は考えてきました。薬物の扱われ方は、各国で異なりますが、ここは日本です。薬物の使用の背景に家庭環境等を考え合わせることは、不適当であると思います。薬物使用者に対しては、断固たる否定的態度、無同情、無寛容を貫徹していきたいと思います。（8/8 追記終わり）

芸能界が、覚醒剤・MDMA・大麻など、色んな薬物で騒がしい。というよりは、日本社会全体と言うべきか。僕は、校長が朝礼で「薬物を使うような大人を見たら、堂々と軽蔑しなさい。君たちはエリートです。分かったか！」と言うような中学・高校で育った。むろん、それが無くても、個人的にこういうことに嫌悪を覚える人間だし、タバコも全くやらない人間だけれども、ここは一つ冷静に、薬物と共感覚の関係について語ってみる。

実は、薬物（特に違法薬物だが）と、共感覚・アスペルガー症候群・離人症・統合失調症・PTSD などとの関係は、専門家の間でも名高い。関係があると言っても、そういう人に違法薬物使用者が多い、という意味ではない。逆である。薬物は常に「健常者」が使うものであって、共感覚者や子どもや動物が自ら使うものではない。なぜそう言えるか。そのトリックを暴いてみる。

今回、ある愚かな芸能人のおかげで注目されている MDMA（メチレンジオキシメタンフェタミン）も、実は共感覚を引き起こす薬物として、専門家の間で話題に上っている。他にも、例えば、LSD という薬物がある。これによって生じる知覚が、共感覚と酷似している、という指摘は、海外ではおそらく一番有名なものである。日本でも、僕がやり取りした専門家の方々が、「ひょっとして大麻（THC、テトラヒドロカンナビノール）やメスカリンやコカインや覚醒剤（主にメタンフェタミン）によって生じる知覚世界は、共感覚者がすでに日常的に体験しているものである可能性がある」とまで語っていた。

（一つ付け加えておくが、LSD によって生じる知覚世界・症状と、共感覚とは、実は僕から見れば全く異なるし、他の共感覚者本人もそう言っている。共感覚のほうが、実際は LSD の症状などよりも、ずっと豊かである。ただし、共感覚は、LSD による知覚体験のようなサイケデリック・人工的なものではない。「共感覚は、LSD によっても生じる」と述べてい

る研究者の主張は、厳密には眉唾物だと思う。他の薬物でも同じで、色々な共感覚者や統合失調症の人と接していると、どう見ても、覚醒剤常習者がテレビで語るような知覚世界よりも自然であり、豊かなのである。）

ある種のキノコに含まれるシロシビンやシロシンによって生じる「異常な知覚」も、共感覚である可能性があると指摘されているし、MDMA やメスカリンと同じくフェネチルアミン類の 2C-B、2C-C、2C-E、2C-I、DOI、MDA、アンフェタミン、メタンフェタミンなども全て、過去に一度でも「共感覚を人為的に生じさせる薬物」として指摘されたことがあるものである。なんだ、結局全ての薬物か、と思わせるような勢いである。違法薬物を使ってくれる愚か者がいるから、そういうことが判明するのである。全く便利な世の中である。

ただし、今の研究は、あくまで「共感覚が無い状態の人間が健常者であり、共感覚は特殊な事態」という観念から抜け切れていないというのが、ひしひしと伝わってくるので、僕が期待する以上の研究はないというのが正直なところだ。「薬物によって生じるような幻覚・知覚は普通の状態ではない。だから、治してやらないといけない。」という発想でしかない。しかし、実はここにトリックがあると思うのだ。

「LSD 使用者の告白する知覚世界と、共感覚とは、似ている。だから、共感覚も一種の障害だ。」というニュアンスを多分に含ませながら論理展開するのは、簡単である。しかし、僕の考えは違う。

結論から言えば、僕の考えは、「現代人の身体において、薬物によって新たに生じるような感覚・快感・症状などは、そもそも共感覚者や前近代の人類においては、自分の身体（本来的な知覚能力・動物力）のみで達成可能なそれらである」ということになる。

この LSD その他の薬物と共感覚との関係について、僕が思うのは、「共感覚者や他の動物は、現代一般の人間が薬物を使用してやっと到達できるような知覚世界を、日常的に自分の身体のみで発揮できている。薬物に誘惑される人間は、動物としての人間の知覚能力にいまだ憧れていながら、自分の身体はその能力を失ってしまったような人間（人体の本来性を欠いた人体の持ち主）である。」ということだ。さらに、「薬物を使うことで、幻覚・知覚の変容・動物的陶酔感を得るような人間」は、確かに罰せられるべきかもしれないが、「薬物を使わずに“健全に”過ごしている大多数の先進国の人間」の知覚自体が、本当に「健全」であるかどうかも問われるべきだ。違法薬物に手を出そうが出すまいが、「動物としての人間本来の知覚能力にいまだ憧れているのに、自分の身体はその能力を失ってしまったような人間である」ということを共有している点では、一般人も薬物使用者も同じ土

俵上に立っている。

我々が本当にやるべきことは、「薬物に手を出すこと」でもなければ、実は「薬物に手を出さないことを賞賛すること」でもなく、「薬物によって生じるような知覚体験は、すでに生まれ持った人体、子どもの頃の知覚世界の中にあった、という視点を持つこと」ではなかろうか。

そうすれば、LSD と共感覚の関係についても、「LSD を使えば共感覚を体験できる」といった愚かな発想は出てこないはずで、むしろ「LSD によって生じる知覚体験を自分の身体のみで日常的に体験できている共感覚者にとっては、LSD なんてものは、いらない」のである。同様に、大麻や MDMA を使わないと陶酔的な知覚世界や共感覚を体験できないような人間は、自分の身体のみでそれを発揮できる能力を失った弱い人体しか持てなくなったがために、それらを使うのである。そうであるから、太古の昔には、「薬物によって生じるような知覚」を失った状態のほうが病気なのだから、今の違法薬物はもっぱら医療行為や呪術に用いられた。それは「正しい」行為なのである。今は、幻覚や共感覚がない人間のほうが「非病」「健全」の状態であって、それゆえ薬物使用は異常者の行為となるが、しかし、その「非病」「健全」の状態という前提がまた、生命体・動物として見れば異常なことであり、今の健常者全体が、常に薬物使用への誘惑に負け得る予備軍であるという点では、本来あるべき子どもや共感覚者や動物の知覚世界とは対立している。

このような誘惑への敗北が、子どもや共感覚者や動物の脳と体では起こり得ない、という言い方が、今後はなされていくべきだ。LSD によって生じる知覚世界と共感覚とが酷似していて、なおかつ共感覚が人類全体の常識的知覚であったということは、「LSD の誘惑に負けないのは、すでに自分の人体のみで LSD の症状を体験している人間だ」ということだ。LSD 以外の薬物でも同じことだ。例えば、メスカリンや覚醒剤によって生じる知覚世界や症状は、統合失調症者が日常的に体験しているそれらである、と言われるが、それは、「本来、人間が統合失調症的な陶酔状態に陥るのに、メスカリンや覚醒剤を必要としない」ことを意味する。

「薬物などいらない」ということが本能になるほどの「薬物的な知覚世界」を、薬物無し

で持っていなければならないのが、本来の人間の姿なのである。これをこそ、「薬物的な知覚世界」ではなく「共感覚」とか「本能」と呼ぶべきなのである。「覚醒剤や麻薬は、いったん始めたら、どんなに意志が強い人でもやめられない」というのは、ウソであると僕は見るようになった。意志でやめられない（また、やめるべきでない）のは共感覚のほうである。一方、意志で薬物をやめられるような人間は、最初から薬物をやらない。当たり前のことである。

「薬物を使うと、こんなに大変なことになるんだ！　気を付けよう！　ダメ、ゼッタイ！」などという論法では、薬物の蔓延は抑えられないだろう。僕はいつも、薬物によって生じる知覚の変容、諸症状、体験者が自慢げに語る快感体験を見ていて、「自分の共感覚に比べれば、たいしたことないな」と思うのである。周りの子どもや、共感覚者や、離人症者の知覚世界の豊かさを見ていると、薬物による知覚世界が、よほどちっぽけに思えてくる。そのちっぽけな知覚世界のために、「薬物は一度始めたらやめられない」と言うのだから、よほど意志の弱い、生命力・動物力のない人がやるものだとしか考えられない。実は、こういった薬物観こそ、今の社会では大切なのではなかろうか。

共感覚者の子どもによく見られる注意欠陥多動性障害（ADHD）という症状があるが、これを押さえつけるのに、メチルフェニデートという覚醒剤の一種が使われる。覚醒剤取締法の規制に入らない覚醒剤である。しかし、これが合法か違法かということは、別に重要な問題ではないと僕は思うのである。タバコやカフェインやアルコールが合法で、コカインやアヘンが違法である、などということは、根源的な問題にとっては、重要な問題ではない。僕がいつも根源的な問題だと思うのは、「子どもらしい子ども」を「社会通念やルールに従えない、落ち着きのない多動人間」という論理にすり替えて、これを薬物でコントロールしようとする社会のほうだ。

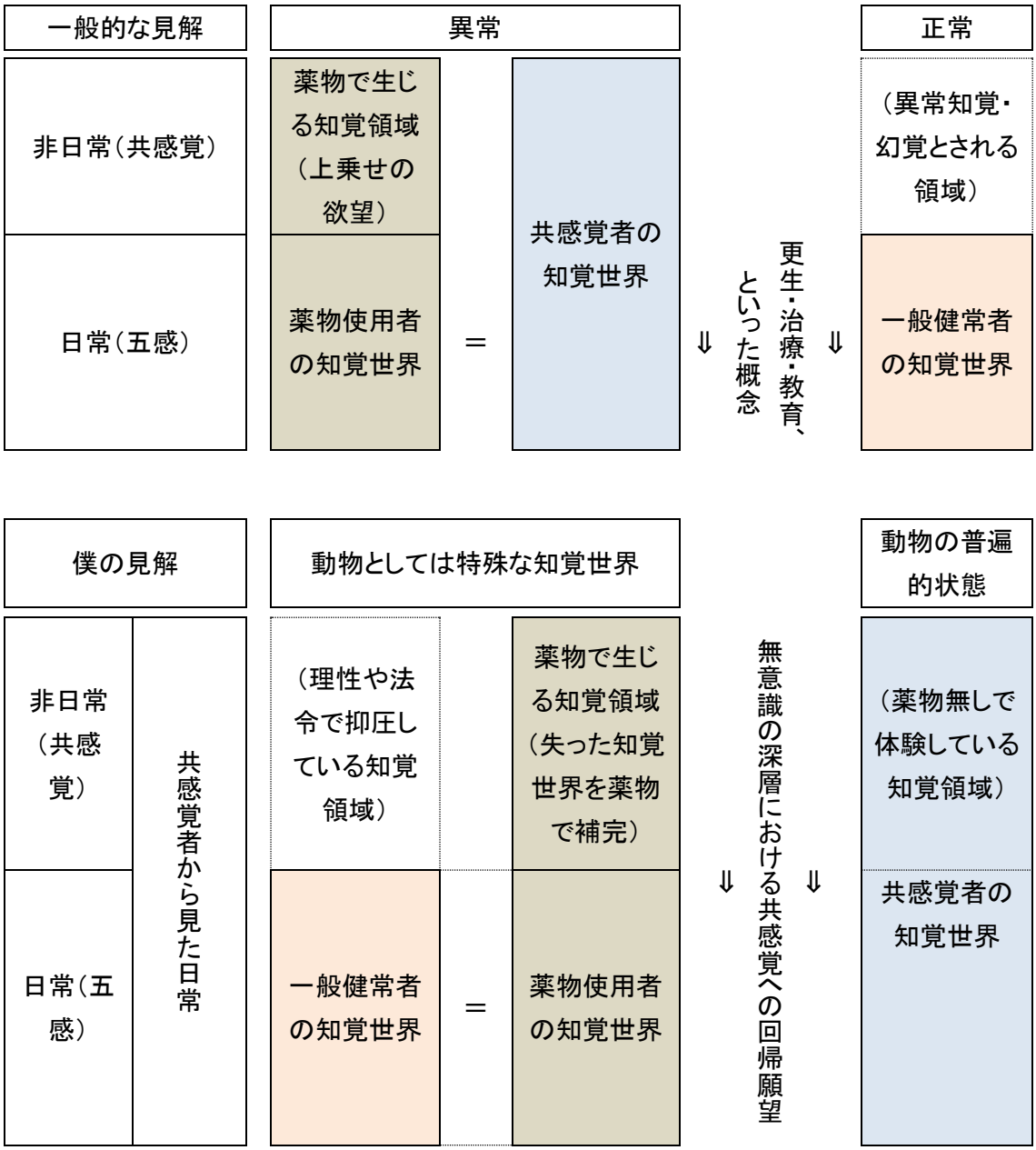
ADHD のケースは、LSD と反対に、「メチルフェニデートによって実現する子どもの落ち着いた状態は、子どものあるべき姿ではない」という形で、今の社会全体の薬物観のおかしさが露呈している。普通に鬼ごっこをして笑顔で走り回るような子どもに「ADHD」という診断が下され、合法の覚醒剤が処方されている。それで満足している親や専門家を見て、どうかしていると僕は感じてきた。ADHD は「精神障害」か「発達障害」か、「後天的」か「先天的」か、などという議論も、安易な心身二元論に基づくものにすぎない。それよりも、母親が家の中の家具や小物を色彩の落ち着いたものに変えてみたら、子どもの多動が治った、などというケースを僕は見てきた。「ADHD」というのは、子どもの発達障害ではなく、アメリカ型の大人社会という「障害」が子どもに対して「実在するかのように」相対的に定義付けている空想病にすぎない。いつも、薬物で捕まって哀れな人生に突入していく人間を見ていると、実はそういう親や専門家や医者も、結局はそれと同じ性質の人

間であると感じることがある。

薬物使用者は、「誘惑に負ける精神的弱さ」の根源に「動物としての弱さ（生命力の弱体化）」を露呈しているという気がする。ルールによって押さえつけても、世間体を気にさせても、治るような問題ではないと思う。「動物としてどうかしている」「哀れで滑稽な動物である」という指摘をしなければ、ダメだと僕は思うのである。もし、今、あらゆる物質文明が失われて、再び旧石器時代の生活を強いられたなら、真っ先に死に絶える弱弱しい動物はあなたですよ、と言うしかないと思うのである。薬物に手を出しているような大学生も同罪である。共感覚者や子どものほうが、よほど立派である。薬物をやるような人間に、本当の共感覚は分からないだろう。そして、それを非難する現代社会のあり方も「同じ穴の狢」だと思う。

第七部　薬物使用者に見られる共感覚体験欲求の機序

2009 年 8 月 7 日　起筆
2012 年 1 月 22 日　最終更新



脳死を共感覚から考えたい

2009 年 12 月 1 日　起筆、擱筆、公開

改正臓器移植法の成立以来、ずっと考えていること。
共感覚者には、胎児期の記憶がある人（受精後一か月かもしれないし、出産直前かもしれない）はいくらでもいるけれども、これを脳死の問題に結び付けて考えるたびに、どうしても心を痛めてしまう。

日本も「脳死は人の死」として、これまでの我々の生命観を転換して今年から新たな時代に入っているわけだけれども、これと矛盾しない態度としては、当然、「脳が形成されていない時期の胎児に命はない」という態度があるのであり、これまた賛否両論ある。つまり、寿命は延びているのに、「命ある」期間は前後がカットされていく、そういう生命観を我々は採用することに決めたわけだ。

福岡伸一氏も、「脳死」を死と認めるなら、「脳“始”」は 27 週目だから、受精からその時期までは命がないということも認めないと、逆におかしいと述べていたが、もちろん、それにも一理あるし、「脳“始”」一つ取っても 5 週目から 30 週目まで色々な意見があるのであり、しかもどれが正しいなどという問題でもない。ただ一つ、「たとえ、5 週目から 30 週目までの時期に記憶があったと断言する共感覚者や自閉症者に人生の中で出くわすな、と言われても、無理である」という現実だけが、私の目の前に横たわる。

それにしても、胎児期の記憶がある共感覚者が、「脳死は人の死」「胎児に自己意識はない」といった考え方に対して持っている抵抗感は、「考え」「思想」「意見」と言えるものではなく、むしろ「本能的な抵抗感」とでも言うべきもので、共感覚を持って生きる私自身にはその気持ちがよく分かるのであり、何とかしたいと思う。それを考えると、「脳死」なる概念は、人工呼吸器が生み出したものではなく、人間の知覚退化が生み出したものだと言えるし、少なくとも私はそう感じる。

我々人間が胎児期の記憶・前言語的記憶をなくしたことで、「脳死は人の死」と認めることが楽になったというのが、本当なのではないか。そして、日本人の知覚もその時代に入った、ということだと思う。それは決して隠してはならないことだと思う。

今のところは、「自己意識を生み出す器官」と「脳」とが一致しない自覚のある離人症や解離性遁走（ミラータッチ共感覚もまさにそうである）といった症状が確認されているにも

かかわらず、一般的には「自己意識を生み出す器官」と「脳」とが一致しているということになっている、つまり、心臓や肝臓や血液や骨、あるいは他者や他の物体は自己意識に関与しない、という暗黙の前提があるから、一見、それ以上の問題は起きないように見えている。ただし、欧米では「脳死」一つ取っても、「大脳皮質死」「脳幹死」など、多種多様の概念があって、「自己意識」の所在がどこかを突き詰めていった場合に、いずれ「視覚野は自己意識に関与しない」として、例えば前頭前野・ウェルニッケ野・ブローカ野などが自己意識の物理的所在位置だという「観測」が出たとする。

しかし、それで終わると思ったら間違いで、今度は前頭前野の中でさらに自己意識の所在位置を特定しようとするはずで、極端なことを言うと、「自己意識は脳のうちのＸという場所にあるから、Ｘがダメージを被った場合に、視覚野が生きていて目が見えていても、死体とする」という判断もありうるはずであり、「脳死」ならぬ「前頭前野死」とか「言語脳死」といった概念が出てくることになる。（というより、アメリカではそういう立場も何でもある。）

よく考えると、これらの見解と、今まで「自己意識は脳にある」として心臓や他の臓器をカットしてきた我々の精神原理との間には、何の違いもない。（少なくとも、自己意識の物理的所在位置Ｘは存在しないだろう。）

さすがにそこまで来ると滑稽だろうという見解もあるかもしれないけれども、むしろ、今の我々の脳死の議論は、胎児記憶の完璧なもっと重度の共感覚者や自閉症者から見れば、きっと十分に滑稽なものだろう。

この考え方を、老年期とは逆に、冒頭のように胎児期・幼少期に持ってくると、例えば「高度な言語活動を示さない時期の幼児に自己意識や記憶はないと見なす」という態度もありうる。なぜならば、将来的に大多数の人間が、これまで胎児期の共感覚を失ってきたのと全く同じように、3歳や5歳頃の記憶を失っていることはありうるからだ。

そういう社会の中にあって、「いえ、私には5歳のときの記憶があります！」とある人Ａさんが主張したとして、その社会の「前頭前野死」支持者・「言語脳死」支持者からＡさんの主張が認められるかどうか、という問題は、冒頭の共感覚者の記憶を耳にした日本人の中に、「えっ！　そんな人がいるなんて！」と驚かないで納得できる人が今どれだけ生き残っているか、という問題と似ている。

いや、似ていると言うよりは、全く同じ問いかけであろうし、「その全く同じ問いかけの反復の途中で、我々人間はちょうど今現在、“脳”という器官を通過しているだけのことであ

る」という意識は、胎児記憶のある共感覚者や対女性共感覚のある私にとっては、おそらく知識ではなくて、先験的意識とでも言うべきもので、先験的意識だからこそ、そこには何とも言いようのない寂しさとともに、ああ、自分は生きているのだという実感が伴う。

第三編　三十歳～三十九歳

第一部　拙著が出版されます

2011 年 5 月 26 日　起筆、擱筆、公開

拙著が 5 月 30 日に出版されます。

http://www.gentosha.co.jp/book/b5124.html
『私には女性の排卵が見える　共感覚者の不思議な世界』（幻冬舎・新書）

目次

■序　この本で告白する私の感覚

■第一章　この性的感覚の特徴
●感覚が最も鋭かった幼少期
●五歳頃から十二歳頃まで、「二重人生」の始まり
●「美しさと表裏一体の苦しさ」に悩んだ十三歳頃から十八歳頃まで
●十九～二十歳頃、女性の色を書き留め記録を始めた
●「共感覚」という概念に出会った二十一～二十二歳頃
●他者と共有できるようになった二十三歳頃から現在まで
●子孫を残してくれやすい年代の女性に対して発揮

■第二章　この性的感覚の探究に向けて
●この感覚を何と名付けようか
●この性的感覚を証明するとしたら
●「共感覚」との出会い
●幼児における共感覚の普遍性について
●目視のみで女性に触ってしまう感覚の扱い
●オーラ・ブームに対処した日々

『岩崎純一全集』第五十五巻「科学技術、産業（一の五）」

●「排卵」「性器」という言葉がない時代
●「昔の日本女性にできていたこと」に頼ってみよう
●私が自分の性的感覚に対して持っているべき姿勢とは

■第三章　男女の体の仕組みから私の性的感覚を考える
●私は女性の何を感知しているのか
●想像妊娠
●動物のオスの性的能力
●周期排卵と交尾排卵
●卵胞波
●初潮の低年齢化と精通の高年齢化
●フラットなオス
●性同一性障害や同性愛と私の性的感覚との対比
●性染色体との関連
●「共感覚」の概念にも少し不満を持った私
●一般男性がこの性的感覚を得るとどうなるのだろう

■第四章　昔の日本男性の女性観から私の性的感覚を考える
●和服と私の性的感覚との心地よい関係
●上古代日本の女性の装身具・身体加工の意味
●ネイティブ・アメリカンと鳥居
●「人を思いやる」とはどういうことか
●歌舞伎の女形・和歌の代理詠
●日本文化研究者による「共感覚」研究の質の高さ
●「一脳一自我」の不安定さ
●自由意志
●ラプラスの悪魔
●禅と私の性的感覚

■結　私の性的感覚のこれから

■主な参考文献

第二部　拙著『私には女性の排卵が見える　共感覚者の不思議な世界』について

2011 年 5 月 31 日　起筆、擱筆、公開

新しい拙著は、26 日あたりから店頭には並んでいたようですが、一応、昨日が発売日でした。すでに色々なご感想を頂いています。ありがとうございます。
「女性の生理現象が分かる私自身の共感覚を、共感覚や閃輝暗点、さらには日本文化や私の人間観などと結び付けて語る」という、相変わらず非常に扱いが難しい話題の本ですが、この本の担当編集者は聡明な女性でありまして、最初から「女性の目線・チェック機能」が入って上梓されたということで、それは良かったことだと思っています。

タイトル決定の動向についても、興味深く見守っていました。「タイトルをこれにします」との連絡を頂いたときには、自分でも「ああ、本当にこれで行くのだろうか」と、さすがに動揺しました。

しかし、色々と天秤にかけて考えた末、私が原案で出した『隠されない排卵　―ある共感覚者男性の独白―』、『共感覚と人間　―私の対女性共感覚・ミラータッチ共感覚を中心に―』などの変に凝ったタイトルよりも、いっそのこと、ここは『私には女性の排卵が見える』と言い切ってみるべきだろうと、OK を返しました。いずれにせよ、一度出版してみなければ分からない、という類のテーマだと思います。

私がこの本でやりたかったことは、自分のこの感覚を披露することではなくて、もっと大きなこと、人間存在の根本についての思索の大切さを語ることですし、逆に言えば、私の共感覚や精神疾患の探究の目標はそれ以外にはありません。

ただし、これを語るなら、何か他人の共感覚にかこつけて本を書くより、自分の感覚と昨今の性愛の問題に寄り添いつつ本で語るほうがよいだろう、と感じました。

私の人生の目標と言いますか、生きているうちにやりたいことは、「共感覚」の語や概念を広めることや、ましてや自分の共感覚を広めることでさえなく、むしろ「共感覚」というテクニカルターム無しで先験的に「人間とはそういうものである」、「人間存在はメランコリーである」と感じる心の大切さを語っていくことですので、この本の内容も、性愛と共感覚という一つのテーマでありつつ、私の人生全体の目標にかかわっています。

性愛や共感覚の問題というのは、大変に感性的でデリケートなもので、またメランコリックな性質を元々帯びているものだと私は思っています。現在の日本の共感覚研究者のほとんどが、心理学者・神経科学者・認知科学者・精神病理学者・医者など自然科学方面であるのは、「とりあえず共感覚の実在を検証・確認し、共感覚者を守るためには、共感覚が元々帯びる感性的性質（メランコリーやエロスや文学的感性）を語ることを回避する分野でしか、共感覚を扱えないから」だと、私は前々からそう思っています。

それはそれで必要な研究だけれども、もう一方の側面も、どうしても同じくらい今の日本にほしいと、私は日々感じて生きています。人間が持ちうる豊かな感性をそのままストレートに語る人がもっといてもいいのではないかと思います。性愛の問題を共感覚に広げたり、鬱病やひきこもりや自殺問題に広げたりして語ることは、私にとっては大変に自然

なことであると感じられます。
　もっとこれらの問題に多くの日本人が取り組めば、社会はもっと温かいものになるだろう。私はそう思って、この本を書いてみました。

第三部　私の知覚世界全般の解説とサイトご訪問者の統計

第一章　私の知覚世界全般の解説とサイトご訪問者の統計(1)

2013 年 1 月 1 日　起筆
2013 年 3 月 2 日　公開
2016 年 9 月 11 日　最終更新
別添資料を見よ。

第二章　私の知覚世界全般の解説とサイトご訪問者の統計(2)

2013 年 1 月 1 日　起筆
2013 年 6 月 6 日　公開
2016 年 9 月 12 日　最終更新
別添資料を見よ。

第四部　共感覚に関連する知覚様態・症状

2013 年 2 月 5 日　起筆
2015 年 7 月 16 日　公開
2017 年 9 月 24 日　最終更新

　共感覚に関連する以下のような知覚、症状、疾患、心理なども扱っています。これ以外のものも扱っていきます。
　直観像記憶、不思議の国のアリス症候群（AIWS）、絶対音感、閃光暗点・偏頭痛、Highly sensitive person (HSP)、読字障害・失読症・ディスレクシア、発達障害、サヴァン症候群）
　なお、これらの知覚や症状の詳しい解説は、以下の岩崎純一会長のサイト内に掲載しております。ご参照下さい。

　共感覚に関連する知覚様態・症状の一覧

精神病理学・精神疾患研究
発達障害・学習障害

第五部　共感覚に関連する知覚様態・症状の一覧

2014 年 10 月 11 日　起筆
2015 年 2 月 8 日　公開
2017 年 3 月 13 日　最終更新

概要
直観像記憶（映像記憶）
不思議の国のアリス症候群（AIWS）
絶対音感
閃光暗点・偏頭痛
Highly sensitive person（HSP）
読字障害・失読症・ディスレクシア
発達障害
サヴァン症候群
超音波知覚
女性に特有の症状・知覚について（女性専用スペースの設置）

概要

このページには、共感覚に関連する知覚様態・症状・能力などを挙げています。

むろん、「共感覚」なる概念が中心に位置していてその周囲にこれらの副次的概念があるわけではなく、それぞれがお互いに並列的関係にあるわけですが、やはり第三者に対して最も具体的・視覚的な例示（イラスト・画像・動画などでの表現）をしやすいのが共感覚であり、私のサイトも便宜的にそのようなスタンスとなっています。

ここに挙げたのは、「共感覚に関連する知覚様態の寄せ集め」であり、「私（岩崎純一）が保持している知覚様態」とは（ほとんどが重なってはいますが）必ずしも合致するわけではありません。ここに挙げた知覚様態で私が保持していないものもあれば、私が保持している知覚様態でここに挙げていないものもあります。また、私が保持している知覚様態であっても、全体として、成人後の現在よりも幼少期・児童期・学生期の頃のほうが知覚の強度が大きかった傾向にあります。

むしろ、ここに挙げた知覚様態は、私がサイトを通じて出会ってきた共感覚者が保持している知覚様態を総合したもの（共感覚者の保持率が高いことだけは言える知覚様態のリスト）と言ったほうが的確です。

ただし、私が保持している知覚様態との重なりが極めて大きいのは確かであり、それぞれの関連の知覚様態の項に私の保持状況を記述したほか、以下のリンク先のページにも私が保持している知覚様態をまとめてあります。知覚・共感覚トップにも簡単に記載しています。

●私の知覚世界全般の解説とサイトご訪問者の統計
私の知覚世界 1 私の知覚世界 2

直観像記憶（映像記憶）

●映像記憶（Wikipedia の説明）

共感覚者で、かつ直観像記憶かこれに近い記憶様態を持つ人は、少なくないと思います。

私も、一部の物事や学問分野に対しては、成人後の今も直観像記憶を保持し続けています。以下に特設ページを設けています。

【サイト内の関連ページ】
●直観像記憶と共感覚
●精神病理学・精神疾患研究
●発達障害・学習障害

不思議の国のアリス症候群（AIWS）

●不思議の国のアリス症候群（Wikipedia の説明）

巨視感・微視感・時空間感覚の変容などを伴う症状で、私は、脳の発達や心理的・社会的ストレスと関係があると考えています。幼少期・児童期には多かれ少なかれ誰でも体験し、成人後は主に極度のストレスにさらされた状況で発症すると考えます。

私も、幼少期には頻繁に体験し、とりわけ入眠時に見える曼荼羅のような光景は、恐怖・不安・畏怖の対象とも感動的とも言える摩訶不思議なものでした。

【サイト内の関連ページ】
●精神病理学・精神疾患研究
●不安障害・恐怖症・強迫性障害・PTSD
●身体表現性障害

『岩崎純一全集』第五十五巻「科学技術、産業（一の五）」

●解離性障害

絶対音感

●絶対音感（Wikipedia の説明）
　音高・音程を色彩で記憶している場合には、当然、絶対音感保持者であると同時に共感覚者でもあると言えます。
　私にとっても、絶対音感は成人後も強固に保持し続けている知覚様態の一つです。

閃輝暗点・偏頭痛

●閃輝暗点・偏頭痛（Wikipedia の説明）
　視界をキラキラした星や帯状の光がさえぎり、その後にしばしば偏頭痛を生じる症状です。脳の血管の急激な拡張による周辺の神経への圧迫が原因だという説が今のところは有力のようですが、ニューロンそのものの不全・欠陥によるという説もあり、諸説乱立で、いずれにしても確定的な信憑性には欠けるので、ここでは深く触れません。
　この症状についても、私は脳の発達や心理的・社会的ストレスと深い関係があると考えています。ICD の疾病リストにおいては、便宜的に精神の疾患ではなく神経系の疾患に分類されていますが、明らかに「発症者の性格」と関係があり、私の周囲でも、とりわけストレスを溜め込みやすい女性に多く発症しています。
　ちなみに、芥川龍之介の『歯車』に閃輝暗点と思われる記述が出てきます。
　私の場合、小学校・中学校時代に最も頻繁に発症し、その後頻度が少なくなっていき、成人後にはほとんど消失し、発症しても軽度で済んでいます。

【サイト内の関連ページ】
●精神病理学・精神疾患研究
●不安障害・恐怖症・強迫性障害・PTSD
●身体表現性障害
●解離性障害

Highly sensitive person（HSP）

●Highly sensitive person（HSP）（Wikipedia の説明）
　日本語に訳すと、いわば「極度の敏感人間」。分かりやすく言えば、いわゆる「感受性が豊かな人」の存在を理論化した概念です。
　私も、これに該当するだろうとの指摘を頂いたことが何度かあります。

ただし、この用語は、宗教家やヨーガ愛好家、スピリチュアル愛好家、トランスパーソナル心理学陣営が好んで用いる用語でもあり、やはり私も含め、立ち位置が異なる人が安易に用いると誤解されやすい用語でもあるので、注意すべきです。

【サイト内の関連ページ】
●精神病理学・精神疾患研究
●気分障害
●不安障害・恐怖症・強迫性障害・PTSD
●身体表現性障害
●解離性障害
●適応障害
●睡眠障害
●発達障害・学習障害

読字障害・失読症・ディスレクシア

●ディスレクシア（Wikipedia の説明）
様々な呼称・訳語があり、また呼称・訳語ごとに微妙に意味する内容が異なりますが、大まかに言えば「文字の形状知覚はできているが、意味をとることができていない」状態を言います。
学習障害の一つともされ、共感覚者や発達障害者に多く見かけます。成長するにつれて症状が軽快する傾向にあります。
私も、成人後の現在は全く当てはまりませんが、幼少期・児童期がこの状態であったと自覚しています。

【サイト内の関連ページ】
●精神病理学・精神疾患研究
●発達障害・学習障害

発達障害

●発達障害（Wikipedia の説明）
昨今、日本でも話題の発達障害ですが、これも共感覚と深い関係にあります。
私は、このサイトを通じて様々な共感覚者や発達障害者・自閉症児・アスペルガー症候群の方々と交流してきましたが、明らかに発達障害者には共感覚者が多く、共感覚者には発達障害者が多い傾向が見て取れるために、母校の大学などの共感覚研究者に対して（共

感覚者・発達障害者の知覚世界の深遠さを肯定的に見て）無謀にも主張したり、著書に書いたりしてきました。しかし、当時（2010 年前後）はこのような見解はあまり良く思われませんでした。特に日本では、共感覚研究の側でも精神医学の側でも、このような結び付けはタブーだったようです。

しかしながら、その後数年で、共感覚者と発達障害者（とりわけ自閉症児）との知覚世界の共通性を報告する欧米の研究や論文が日本にも流入し、それを日本の研究者たちも読んだからなのか、私のサイトや著書の視点に対する疑問・批判メールも、なぜか急減しました。不思議なものですが、かなり悔しい思いはしました。

私自身は、発達障害と診断されたことはなく、知人・友人から「アスペ（アスペルガーの俗的な略語）の気があるね」と言われた程度ですが、発達障害者のことは今でも自分の仲間だと思っています。

精神病理学・精神疾患研究内の発達障害・学習障害のページもご覧下さい。

なお、現在は「アスペルガー症候群」などの用語・概念は、精神医学上は破棄されています。日本国民の間では、便宜的に、かつ俗的に「アスペ」などと口頭で用いられていますが、精神医学的な定義とは一致しない場合があります。

【サイト内の関連ページ】
●精神病理学・精神疾患研究
●発達障害・学習障害

【関連ブログ記事】
●「アスペルガー症候群」の廃止や「学習障害」などの名称変更で思うこと

サヴァン症候群

●サヴァン症候群（Wikipedia の説明）

ダニエル・タメット氏のように、サヴァン症候群・直観像記憶・共感覚・アスペルガー症候群の全てを有している人も、世界には存在します。これらの知覚様態・症状は、やはり脳神経系の低次レベルのはたらきにおいて、極めて深い関連性があると言えます。

ただし、実際にサヴァン症候群とされて公式な論文中に言及されている人は世界でたったの数十名しかおらず、これらの人たちは、サヴァン症候群・直観像記憶による膨大な記憶能力だけでなく、世界的にも極めて稀有で強固な共感覚や、社会生活・コミュニケーションに支障が出るほどの重度の知的障害や自閉症を有している人がほとんどです。

時々私を（褒め言葉として）サヴァン症候群だと言って下さる方もいらっしゃいますが、科学的な定義や常識からすれば、当てはまらないとするのが正しいということは言えます。

【サイト内の関連ページ】
●直観像記憶と共感覚
●喪失した共感覚
●精神病理学・精神疾患研究
●発達障害・学習障害

超音波知覚

私のように、超音波が聞こえる人が稀にいます。
（いわゆる若者除けのモスキート音は、可聴音であり、物理学上の超音波ではありません。）
この超音波知覚は、一見すると共感覚とは無関係に思えますが、私の調査や経験一つを採っても、超音波知覚者には明らかに共感覚者が多く、逆もまた然りです。
私は、下記の特設サイトにあるように、超音波知覚者コミュニティ東京というサークルを立ち上げ、活動しています。

【サイト内の関連ページ】
●超音波知覚研究

女性に特有の症状・知覚について（女性専用スペースの設置）

▼　私がご相談を受けて交流してきた、精神・身体症状や共感覚、その他の特殊知覚・症状を持つ女性の皆様に、私のサイト内の女性専用スペースの管理・運営をしていただいております。また、これらの女性の皆様が入居者の多くを占める、シェアハウス型の女性寮も紹介されています。私も寮を支援しています。
女性に特有の症状・知覚については、寮生に解説をお願いしています。
→→　●精神・身体症状、共感覚、その他の特殊知覚・症状の解説の分担などについて

岩崎純一のウェブサイト　女性専用スペース

岩崎純一のウェブサイト
女性専用スペース
Women Only

第六部　麻薬・覚醒剤・危険ドラッグ・指定薬物等による共感覚の出現の知見の有無

と当該薬物の国際条約及び世界各国・日本国の法令等における扱いとの対応表

日本共感覚研究会

麻薬・覚醒剤・危険ドラッグ・指定薬物等による共感覚の出現の知見の有無と当該薬物の国際条約及び世界各国・日本国の法令等における扱いとの対応表

2013 年 2 月 10 日　起筆、作成及び改訂継続の総会承認
2015 年 7 月 16 日　公開
2017 年 1 月 14 日　最終更新、報告
総責任者　　日本共感覚研究会　会長　　岩崎　純一
掲載サイト　http://iwasakijunichi.net/
特設サイト「日本共感覚研究会」
厚生労働省、消費者庁、公正取引委員会、東京都に提供
全ての著作者の著作者人格権を侵害しない限り、CC BY-NC-ND 4.0

本表は、摂取・服用により共感覚（Synaesthesia）が生じるとの学術的知見のある薬物について、国際条約及び欧米法における扱いと日本法における扱いとを比較したものである。

注意点は以下の通りである。

●現在、これらの薬物による共感覚の出現に関する知見は、全てがアメリカ合衆国、ヨーロッパ各国、カナダ、オーストラリアのいずれかの学界において得られたものである。日本においては、共感覚研究者が麻薬・覚醒剤・危険ドラッグ・指定薬物等の経験者を被験者として募集しその知覚体験を調査した例は、一切見当たらない。

●国際条約及び欧米法における「麻薬」や「向精神薬」と日本法における「麻薬」や「向精神薬」には、大幅な違いがあり、日本法における「麻薬」のほとんどは国際条約上は「向精神薬（付表 I）」に分類され、国際条約上の「麻薬」は逆に本来の「麻薬」としてのオピ

エートやオピオイドであるアヘンを含む。

●医学上の「覚醒剤」は日本法における「覚せい剤」と違いがあり、また、日本法における「覚せい剤」は国際条約上は「向精神薬（付表 II）」の「精神刺激薬(Stimulant)」である。

●日本が麻薬及び向精神薬取締法のほかに独立した法律によって規制している「覚せい剤」、「大麻」、「あへん」の全てが、国際条約又は欧米法に同一の区分概念が存在しない区分概念である。

●摂取・服用により共感覚が生じるとの学術的知見がある薬物のうち、現在の日本において合法的にそのことが確認可能なものは存在していない。（所持・使用・販売・譲渡・運搬などが全て違法。）

●欧米と日本におけるこれらの薬物の合法性・違法性の齟齬により、各国によって共感覚について合法的に実施可能な調査研究が異なっている。

●アメリカでは州法により扱いが異なり、州ごとに共感覚について合法的に実施可能な調査研究が異なっている。（一般法では、州法が連邦法よりも優先される。）

●大学教員などの中にも、共感覚者であることを主張すると同時に、自ら麻薬・覚醒剤・危険ドラッグ・指定薬物等の合法化活動を展開したり合法化に賛同したりしている者がおり（大麻合法化への賛同の態度を表明している専修大学の研究グループや武蔵大学の北村紗衣専任講師など)、こうして教育者・研究者側に賛同者が存在する限り、これらの薬物等の使用による共感覚体験者の増加問題はいっそう複雑になっていくものと考えられる。

●たとえ欧米においては合法薬物であっても、日本において違法薬物である限り、それを摂取・服用して共感覚を得たか又は得ようとする日本国籍又は日本国在住の者は、日本の共感覚者コミュニティ、少なくとも本会から追放すべきであると本会は考えており、当該人物を発見し次第、警察・厚労省・自治体・保健所等に通報する。

薬物名称	摂取により生じる共感覚の種類や実状	共感覚の出現を報告した主な海外論文・ウェブサイト等	作用・副作用から見た医学上の大分類（世界保健機関、アメリカ精神医学会の知見	国際条約と欧米の法律における規制（【】は薬物の大分類。欧米は主に医療用途の可否が基準で、医学的知見に法律による規制が追随。）	日本の法令（法律、政令、省令等）における規制（【】は薬物の大分類。日本は主に流行や風紀悪化の阻止が基準で、医学的知見に対し法律による規制が遅れがちで

			に基づく）		ある。）
LSD （リゼルグ酸ジエチルアミド）	共感覚的幻覚作用を引き起こす麻薬のうち、その検証回数及び文献登場回数が最多である。 1960 年代初頭より欧米、60 年代後半より日本において、サイケデリック文化の中で乱用されたが、英米においては共感覚体験を目的の一つとした一方、日本においては「共感覚」の語は見られないが、LSD 流行期の末期が共感覚の学術研究の黎明期に重なる。 日本においては、危険ドラッグの流行へと移る。	Cytowic, Richard E; Eagleman, David M (2009). *Wednesday is Indigo Blue: Discovering the Brain of Synesthesia (with an afterword by Dmitri Nabokov).* Cambridge: MIT Press.	【幻覚剤】	【向精神薬】 向精神薬に関する条約の付表 I CA: Schedule III UK: CD US: Schedule I	【麻薬】 麻薬及び向精神薬取締法
シロシビン （4-ホスホリルオキシ-*N*、*N*-ジメチルトリプタミン）	LSD に匹敵する共感覚的幻覚作用 マジックマッシュルームに多く含まれる。 マジックマッシュルームは、日本では南方の島嶼部を中心に自生し、シビレタケやヒカゲタケなどと呼ばれてきたハラタケ目のキノコの一群にほぼ一致する。八重山列島に自生するものはミナミシビレ	Ballesteros S, Ramon MF, Iturralde MJ, Martinez-Arrieta R. (2006). "Natural sources of drugs of abuse: magic mushrooms". In Cole SM. *New Research on Street Drugs.* New York, New York: Nova	【幻覚剤】	【向精神薬】 向精神薬に関する条約の付表 I CA: Schedule III UK: Class A US: Schedule I アメリカの一部の州で強迫性障害やパニック障害の治療に使用	【麻薬】 麻薬及び向精神薬取締法

	タケ、小笠原諸島に自生するものはアオゾメヒカゲタケなどと命名されている。規制前には、日本でもこれらの島嶼部を中心に摂取文化があったが、規制後は日本全土で違法に流通し、薬物パーティーなどで使用される。	Publishers. pp. 167–88. 「オルタード・ディメンション」オルタード・ディメンション研究会 http://www007.upp.so-net.ne.jp/soma/soma/b05_j.html			
シロシン（4-ヒドロキシジメチルトリプタミン）	シロシビンに準ずる共感覚的幻覚作用マジックマッシュルームに多く含まれる。	Diaz, Jaime (1996). *How Drugs Influence Behavior: A Neurobehavioral Approach.* Englewood Cliffs: Prentice Hall.	【幻覚剤】	【向精神薬】 向精神薬に関する条約の付表 I CA: Schedule III UK: Class A US: Schedule I	【麻薬】 麻薬及び向精神薬取締法
メスカリン（3,4,5-トリメトキシフェネチラミン）	LSD やシロシビンに匹敵する共感覚的幻覚作用	Diaz, Jaime (1996). *How Drugs Influence Behavior: A Neurobehavioral Approach.* Englewood Cliffs: Prentice Hall.	【幻覚剤】	【向精神薬】 向精神薬に関する条約の付表 I CA: Schedule III UK: Class A US: Schedule I	【麻薬】 麻薬及び向精神薬取締法
大麻（マリファナ）	大麻成分のカンナビノイド（特にテトラヒドロカンナビノール（THC））は、強い幻覚作用を引き起こすが、共感覚的幻覚作用は LSD やシロシビンに比べると弱く、むしろ鎮痛作用や多幸感が主。	Cytowic, Richard E; Eagleman, David M (2009). *Wednesday is Indigo Blue: Discovering the Brain of Synesthesia (with an afterword by*	【抑制剤】 【鎮痛剤】 （医療大麻、医療マリファナ） 【麻薬】 アメリカ	【麻薬】 麻薬に関する単一条約の付表 I・IV （大麻、大麻樹脂等） 【向精神薬】 向精神薬に関する条約の付表 II （テトラヒドロカ	【大麻（単独規制）】大麻取締法（大麻の所持、栽培、譲渡等） 麻薬及び向精神薬取締法（テトラヒドロカンナビノール（THC）等）

		Dmitri Nabokov). Cambridge: MIT Press.	の一部の州及びカナダ	ンナビノール（THC）等） CA: Schedule II UK: Class B US: Schedule I オランダ、ウルグアイ、バングラデシュの全土で合法。 アメリカはワシントン州、コロラド州等西部地域で合法。 その他、合法化推進の動きあり。	
アヘン（あへん・阿片）	本来の「麻薬」としてのオピエートやオピオイドである。 五感が混交する作用は目立って報告されておらず、報告された類似の作用も「共感覚」とは異なっている。		【抑制剤】 【麻薬】	【麻薬】 麻薬に関する単一条約の付表 I CA: Schedule I UK: Class A US: Schedule II	【あへん（単独規制）】 あへん法 【麻薬（現在では稀）】 麻薬及び向精神薬取締法
覚醒剤（アンフェタミン、メタンフェタミン、メチルフェニデート等を含む）	メタンフェタミンとメチルフェニデートについては、五感が混交する作用はあるものの、目立っては報告されておらず、報告された類似の作用も共感覚とはやや異なっている。 アンフェタミン及びアンフェタミン類の一種である MDMA（別項）については、共感覚の出現が報告されている。		【精神刺激薬】	【向精神薬】 向精神薬に関する条約の付表 II CA: Schedule I UK: Class A – B, or POM US: Schedule II メチルフェニデートのみ、ADHD（注意欠陥・多動性障害）やナルコレプシーの治療に使用。	【覚せい剤（単独規制）】 覚せい剤取締法 【向精神薬】 麻薬及び向精神薬取締法（メチルフェニデートのみ。リタリンなどに含まれる。）
LSA（リゼルグ酸	多量摂取により LSD に準ずる共感覚的幻覚作用。 海外では共感覚体験のため使用されてい	*Erowid Psychoactive Vaults*, Erowid.org,	【幻覚剤】	【向精神薬】 UK: Class A US: Schedule III	日本の園芸店でも売られている一部のヒルガオやソライロアサ

アミド）	る。	retrieved 2012-02-03			ガオの種子に含まれるが、抽出困難。
MDMA（3,4-メチレンジオキシメタンフェタミン）	学術論文による共感覚出現の報告よりも、実際の使用者による共感覚体験の報告が多い。 共感覚の出現も見られるが、各五感の過敏化の作用のほうが大きい。 多幸感や共感・共有感などの精神変容をもたらすが、これらは共感覚には該当しない。	Butterfly Bomb. "Synaesthesia & Ecstacy: An Experience with MDMA". Erowid.org. Aug 6, 2002. https://drugs-forum.com/forum/	【幻覚剤】 【精神刺激薬】	【向精神薬】 向精神薬に関する条約の付表 I CA: Schedule III UK: CD Lic US: Schedule I 1985 年までは欧米で PTSD（心的外傷後ストレス障害）の治療に使用。	【麻薬】 麻薬及び向精神薬取締法
MDA	同前	MDA erowid.org https://drugs-forum.com/forum/	【幻覚剤】	【向精神薬】 向精神薬に関する条約の付表 I CA: Schedule I UK: Class A US: Schedule I	【麻薬】 麻薬及び向精神薬取締法
bk-MDMA（MDMC、Methylone）	同前	bk-MDMA erowid.org https://drugs-forum.com/forum/	【幻覚剤】	【向精神薬】 CA: Unscheduled UK: Class B US: Schedule I	【麻薬】 麻薬及び向精神薬取締法
MDEA（MDE）	MDMA と同様の作用をもたらすため、代用される。 MDEA の化学構造の亜種が含まれる薬物は、日本で流通する危険ドラッグにも	MDEA erowid.org https://drugs-forum.com/foru	【幻覚剤】	【向精神薬】 向精神薬に関する条約の付表 I CA: Schedule I	【麻薬】 麻薬及び向精神薬取締法

	含まれている。	m/		UK: Class A US: Schedule I	
bk-MDEA（MDEC、Ethylone）	前述の MDEA の ß-ketone analogue（類似の亜種）の一つ。 ここ数年で海外の乱用者によって共感覚的幻覚作用が急速に明らかになっているが、日本で流通する危険ドラッグにも多く含まれるようになり、極めて懸念すべき状況にあると考えられる。	https://drugs-forum.com/forum/	【幻覚剤】	【向精神薬】 schedule 1, positional isomer of butylone	【麻薬】 麻薬及び向精神薬取締法 【危険ドラッグ】 MDEA の化学構造を変えた亜種
AMT（α-メチルトリプタミン）	聴覚の過敏化を中心とする共感覚的幻覚作用が報告されている。	AMT erowid.org https://drugs-forum.com/forum/	【幻覚剤】	【向精神薬】 CA: Uncontrolled UK: Class A US: Schedule I	【麻薬】 麻薬及び向精神薬取締法
5-MeO-AMT	同前 AMT よりも少量で共感覚が生じるため、オーバードーズの危険性がある。	5-MeO-aMT erowid.org https://drugs-forum.com/forum/	【幻覚剤】	【向精神薬】 US: not scheduled	【指定薬物】 医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律 （物質名は省令で定める。）
DMT（ジメチルトリプタミン）	アヤワスカに含まれ、アマゾン地方の一部でシャーマンがこれを摂取する習慣があり、共感覚的幻覚作用が見られる。	DMT erowid.org https://drugs-forum.com/forum/	【幻覚剤】	【向精神薬】 向精神薬に関する条約の付表 I CA: Schedule III UK: CD Lic US: Schedule I	【麻薬】 麻薬及び向精神薬取締法
5-MeO	同前	5-MeO-DMT	【幻覚	【向精神薬】	【指定薬物】 医薬品、医療機器

-DMT		erowid.org https://drugs-forum.com/forum/	剤】	UK: Class A US: Schedule I	等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律 （物質名は省令で定める。）
5-MeO-DiPT	性感の強化のために使用されるが、強烈な共感覚的幻覚作用も伴う。 日本で流通する危険ドラッグにも化学構造を変えたものが含まれており、「共感覚セラピー」などと称するセラピーで使用されているおそれがある。	5-MeO-DIPT erowid.org https://drugs-forum.com/forum/	【幻覚剤】	【向精神薬】 UK: Class A US: Schedule I	【麻薬】 麻薬及び向精神薬取締法
5-MeO-MiPT	同前 音の増大など聴覚の異様な変容を伴う共感覚的幻覚作用。	5-MeO-MiPT erowid.org https://drugs-forum.com/forum/	【幻覚剤】	【向精神薬】 UK: Class A US: not scheduled	【指定薬物】 医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律 （物質名は省令で定める。）
5-MeO-DPT	同前 音の増大など聴覚の異様な変容を伴う共感覚的幻覚作用。	5-MeO-DPT erowid.org https://drugs-forum.com/forum/	【幻覚剤】	【向精神薬】 UK: Class A US: Schedule I	【指定薬物】 医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律 （物質名は省令で定める。）
PCP （フェンサイクリジン）	共感覚的幻覚作用が見られるが、そのような知覚変容よりは失見当識・妄想の症状など、統合失調様の症状を呈する。	phencyclidine erowid.org https://drugs-forum.com/forum/	【幻覚剤】	【向精神薬】 向精神薬に関する条約の付表 II CA: Schedule I UK: Class A US: Schedule II	【麻薬】 麻薬及び向精神薬取締法

『岩崎純一全集』第五十五巻「科学技術、産業（一の五）」

【参考文献】

◆国際条約

麻薬に関する単一条約（Single Convention on Narcotic Drugs、1961～）

向精神薬に関する条約（Convention on Psychotropic Substances、1971～）

麻薬及び向精神薬の不正取引の防止に関する国際連合条約（United Nations Convention Against Illicit Traffic in Narcotic Drugs and Psychotropic Substances、1990～）

◆日本法

麻薬取締法（1953～）

麻薬及び向精神薬取締法（現行の麻薬取締法、1990～）

大麻取締法（1948～）

覚せい剤取締法（1951～）

あへん法（1954～）

医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律（1960～）

麻薬、麻薬原料植物、向精神薬及び麻薬向精神薬原料を指定する政令（1990～）

国際的な協力の下に規制薬物に係る不正行為を助長する行為等の防止を図るための麻薬及び向精神薬取締法等の特例等に関する法律（麻薬特例法）（1991～）

医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律第 2 条第 15 項に規定する指定薬物及び同法第 76 条の 4 に規定する医療等の用途を定める省令（2007～）

◆海外サイト

http://www.deadiversion.usdoj.gov/ （ U.S. DEPARTMENT OF JUSTICE ・ DRUG ENFORCEMENT ADMINISTRATION
Office of Diversion Control）

◆日本サイト

http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/iyakuhin/yakubuturany

『岩崎純一全集』第五十五巻「科学技術、産業（一の五）」

ou/

（「薬物乱用防止に関する情報」厚生労働省）

http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/no_drugs/（東京都福祉保健局）